

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年三月二十五日 印刷
昭和四十三年四月一日発行 (毎月一日発行)
(第三十一号)



No. 31

明治百年記念、百句シリーズ

四月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリツトル詰・一、三五〇円

酒 清
日本盛

ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



疲労

神経痛は

すぐ

おとり下さい

活性ビタミン複合剤

ハイベスト

全身倦怠・肩こり・腰痛
関節痛・食欲不振・便秘
胃腸機能の減退・疲れ目

5 mg
25 mg
50 mg

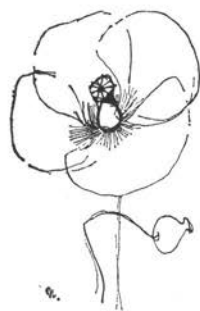


アサヒ



高峰秀子

賭ける気で左右の耳がききわけ
どぶ鼠まねて居留守のかくれんぼ
裏切つて当選したを得意顔
初めから逃げだす構えの発起人
ありていはほんとの馬鹿が金を貯め



今日のこたば

◎二三日前ふと「贅沢は拝む心を忘れさせ」という私の旧作を思い出した。
◎私の知ってる家庭で一女三男を恵まれ、裕福でもあるし、世にも羨ましい家庭であるのに、もう一人女の子がほしいという。理由は将来三人の男の子に夫々配偶者が出来て、嫁たち三人は仲よくなり姉妹一人だけのけものにされると母親亡きあと可愛そうだということである。こんなのは贅沢でなく貪慾だ。
◎又一方私にはよく呑みこめないが消費経済というものがある。物質や人の心に対する認

識や感謝やに全く欠けて日常もつたない事ばかりがなんと目につく事だろう。そのくせ生活が難しい社会の構成が悪いと不平を言う。これが近代生活の姿である。
◎私は三悪の中に貪慾を厳しく戒めているし、キリストは「野の花のことを考えてみるがよい。今日は野にあって明日は炉に投げ入れられる草でさえ神はこの様に装ってくださる」と訓える。拝む心というものは大切である。

川柳塔四月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

ペロペロキャンデー……………西尾葉…(2)

生駒町から……………麻生葭乃…(19)

川傍柳初篇研究……………(五十八)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

明治百年記念

近詠百句……………梶元紋太…(26)

川柳明治百年……………清水白柳…(22)

私論・柳論

ペロペロキャンデー

夕桜とんぼ返りをしてみたしふと口ずさむ四月の良い時候とあった。蟹は甲羅に似せて穴を掘るといふ。そこで今月は自分の商売の菓子メーカーの話をすることにした。千日前の竹森寺の門前の、みたらし屋のおばあちゃんが、いつの間にもやら店をやめた。縁日の鯛焼屋のネジリ鉢巻のおっさんの姿が見えなくなったのかと思うとそうではなく、百貨店の地下室へ移っていた。大百貨店ともあるうものが、細々と生計をたてているおばあちゃん、おじいちゃんの仕事をとってしまった。儲かることなら何でもやるという大変な時代になつたものだ。

この頃アメリカンスタイルペロペロキャンデーという名の飴菓子が物すごいブームで売れている。これは棒の先に丸型の飴をセロハンで包んだ、実に他愛のないものだ。そもそもこの飴は、さる問屋の若主人が、アメリカカへ行つた時これを見て来て、メーカーに注文したが、メーカーは明治時代からあるものだと一笑にふしたが、兎に

自選百句	内藤きさ子	(44)
若柳潮花	若柳潮花	(46)
諸家	諸家	(39)

近作柳樽	若本多久志選	(30)
------	--------	------

秀句鑑賞	後藤梅志	(28)
------	------	------

初步教室	菊沢小松園	(48)
------	-------	------

大萬川柳「素通り」	清水白柳選	(52)
-----------	-------	------

★柳界展望	(薰風)	(54)
-------	------	------

★本社三月句会	(庸佑)	(56)
---------	------	------

★各地柳壇	(文秋)	(60)
-------	------	------

「花見」	河原みのる選	(50)
------	--------	------

一路集「筆」	久米奈良子選	(50)
--------	--------	------

「コーラス」	浜畑胡蝶選	(51)
--------	-------	------

★編集後記	(白柳・一三夫)	(64)
-------	----------	------

角作ってくれと言われて、根負けして作ったのが大当りに当たったんだ。何しろ始を包む僅かなセロハン代だけが一カ月何億円という支払だときいてあきれかえる。これは品物よりペロペロとか言う名がブームをよんだのだ。素人は怖い。

アイディアで勝負をする時代になった。菓子メーカーの自分は、アイディアを求める為に菓子の売場を見ていては駄目だ、化粧品部をのぞき、貴金属部を見て廻らねばならない。そしてとんでもない商品を作り、とんでもない名前をつける。これは川柳にも言えるかも知れない、題名にとらわれた観念的な句想では、迎も飛躍した良い句が出来ないと一般だ。石鹼を作るのに塩を入れないと出来ない、或日塩と砂糖と間違えていたら、あの透き通った石鹼が出来た。紙を作るのに、或種の薬を入れる。或日その薬を入れるのを忘れた、そうしたらペラペラの変な紙が出来た、これが吸取紙の初まりだ。川柳にも、塩と砂糖と間違えていたら、薬を入れられる者がいないから、あれば柳界の一つの革命になるかも知れない。間違えて入れるのは素人であり、薬を入れ忘れるのは素人工だ。素人工起つべし、新人怖るべし。

(西尾 榮)

川柳塔

中島生々庵選

大阪市 正 本 水 客

北風の下に沈んで灯をともし
幻想をよぶ粉雪の空の厚さ
大和三山とう山の雪にまけていず
教育ママ夫に失望した人と知る
個性をなくした人間がブランコにいる

東大阪市 久米奈良子

流しあう背に十字架の姉妹
暗がりに鳴咽となりしみだれ髪
窯の火のたしかに燃えて刻をまつ
えくぼにも不服があつて右左
もの云えばみな偽りとなる姿勢

大阪市 橋 高 薫 風

墓があり急に土あたたかくなる

鳥賊提げて濡れ手拭を提げるよう
死ぬるまでたこ焼 焼くといういのち

春日大社万灯笼

静かな灯三千集ってしずかなり

那智の滝

滝の白 雨は斜めに降りかわり

青森市 工藤甲吉

病氣直って元のかたくな
上着はぬぐがいつこうに働かず
正行をさとし正成出稼ぎへ
友人総代もおっつけ逝きます
冬の木は春がくるから耐えに耐え

大阪市 後藤梅志

鎖ながれた犬鎖がれた顔で行く

万葉のまろさが舌にのる謠

よう忘れまんねと応接間の笑い

水槽空輪オタマジックシお前もか

新聞を見てハラの立つ黙否権

岸和田市 内藤きさ子

晩菜が向いへ知れる換気扇

節分の鯛ともかく尾頭さ

花札の落ち目にも似て夫病む

還暦の運転免許真面目なり

独身を通す扇で食べている

岡山県 浜田久米雄

構想はよいがみんながついて来ず

ひょうたんのほこりを払う花だより

春を待つところ盆栽にも見つけ

もう来ないことしの春へすこし酔い

香典と書き面影を探って見

倉敷市 本田恵二朗

嫁かせて知ったさびしさ差し向い

猿真似は止せとほんとのこと言われ

とちめる気で来てとちめられちまい

先頭に出たら七人敵がいた

はやり風引く順番が今日当り

高槻市 傍島静馬

テレビちょっと止めててほしい借電話

昇進に合わせたように児が生れ

辞退するママへこどもの腹が鳴り

おやしまで教育ママにしごかれる

女神からおかめに落ちた倦怠期

大阪市 本多柳志

犬猿の仲を利権で踊らされ

じわじわと自信くずれる待ちぼうけ

当らぬと見えてまだ買うてはる宝くじ

ご祝儀を包んで硯見当らず

七人の敵に構える廻り椅子

愛媛県 村上旭童

元農夫やっぱり空の青がよし

螢光灯の下で生きてる人のむれ

ながいものにまかれた顔は見つめられ

あかぎれへ立春という水の冷え

湯豆腐のほしい日もあり家を恋う

桜井市 岩本雀踊子

世の中をすなおに暮せぬ旗を立て

働らせる幸水までおいしくて

手のひらに今日一日の稼ぎ高

悪縁と云うのがここまでついてくる
云いきった嘘が淋しい夜にする

新居浜市 安藤桂仙

ありていに申し上げれば馬鹿ばかり
手枕があごを落とした妻の留守

出なおせる年令でなかった日のうつろ

過去は過去廻り舞台をまわす役

何時までを生きる植木をねじ曲げる

岸和田市 葛城伊三郎

如月に金魚空しき日がつづき

鼻頭逆さになぜて焼芋屋

ガラス越標本のように蛾の静

どん底に落ちて予想を売ってます

裏庭の梅を覗いてあやしまれ

大阪市 不二田一三夫

正座した姿で蛙餌を狙い

底にのこった砂糖へベトナムの子がうつる

寄席(三句)

タレントを前田勇の叱るペン

しっくりと聞かせる芸を聞ことせす

台本の負けアドリブへ拍手くる

京都府 大鶴喜由

悲しさも怒りも笑う程に老け
妻だけが知る昼の顔夜の顔

チャンネルをひねりかえても恋の唄
不手際なデートはすまじ桜咲く

岡山市 服部十九平

おみくじが大吉声をたてて読み

隣席の羽織の襟を折ってあげ

まだ何も言わぬ高座へもう笑い

夫妻外遊夫の助手で帯結ぶ

大阪府 早川清生

道路建設井戸あってもめ暮あってもめ

神々の怒りへ次は妙な歌

五輪速報 下の方から漢字の名

元將軍野に棲み陛下に忘れられ

鳥取市 河村日満

明治百年資本家たちの自画自賛

知事さんと飲んだ誇りの二日酔

賀状舞い戻り一票見失ない

寝小便孫も初夢見たらしく

出雲市 尼緑之助

句になるぞなるぞと我が家の牡丹雪

小鳥がわめく十センチほどの雪景色

寒の納屋老いをこつこつ糞仕事
風をひく奴は馬鹿だと思つたに

名古屋市 吉田水車

雨宿り自動扉に慌てたり

ともかくもキラキラキラとマダム出る

倒産の家にしてなお花を活け

文明は悲しからずやヘルメット

門真市 福島鉄児

庭掃除してたら春を教えられ

親一人子一人百まで生きんかな

停年が来て頑固さが少し折れ

救急車来る間舗道に伸びたまま

大阪市 大坂形水

白浜へ精進悪いのが揃い

暖房がきいてビールがよい座敷

喰べものの店にかぎると儲けてい

健康法節はどうでもよい謠

大阪市 市場没食子

ボーナスにつれ年玉も膨れける

四十年前の女に呼び出され

賽銭は十円つんぼ戎が横を向き

梯子酒松の内から借りが出来

室戸市 奴田原紅雨

ボーナス日父よあなたは強かった

クレオンのママがほんとの顔だった

ひよっとして俺が死ぬ日の子を思い

盃の底に無策の顔がある

下関市 桜川不水

古稀記念喜寿には摘める茶の実まく

サン付けて呼んだら女房舌を出し

底冷えをいたわり合つて卵酒

春菊をおとしフグ鍋これでよし

大阪市 山川阿茶

男にはなれず女にもなれず

権力があってババ抜きなどさせず

借金を断り自殺を心配し

徹夜営業朝の掃除をして眠り

藤井寺市 西いわを

限界を知つて自殺の極地に來

咲く花の少なき頃よ黄水仙

ハンターへ心は躍る雪の道

いらぬこと覚え社交の役に立て

大阪市 金井文秋

建売りを建てた大工が危ながり

問屋でも置場に困り押しつける
靈験を信じて通う不倅せ

反省をしても足りない物価高

大阪市 浜 畑 胡 蝶

恐妻と云う名で通り無沙汰がち
イヤリングどこかで捨てた恋でした

張り合つて取つた男に先立たれ
合理化へ働き好きが先ず切られ

大阪市 西 出 一 栄

春や春プランを組まずツリーリスト
一坪へ種それぞれに咲き分ける

逢うて来た余韻小犬とたわむれる
気軽うに孤独たのしむ留守居する

岡山県 大 森 娛 句 楽

ブレーキの故障車に似た夫婦仲
明治から生きた字引の裁き役

大和魂鍛え込まれた昔ごと
置物も踊り出しそな恵比寿祭

神戸市 仲 どんたく

囑託にまだ青筋を立てる意気
辿り着く形で土曜の午後に来る

パチンコで孫へ土産を稼ぐとし

肩書を取ればこんなに好い男

兵庫県 大 江 秋 月

引越した隣も酒のいける口

定期異動とり残された空虚の日

新生をピースにかえて見合いの場

昇給へ妻には妻のあてがあり

京都市 都 倉 求 女

ひやかしへたまにはまともに返事する

雪だるま仕上げの化粧は屋根の雪

半年の稽古へ発表会は風邪

デパートは婦唱夫随でねり歩き

呉 市 林 野 甍 光

二人してなめ合う過去の傷をもち

迷信と云われる程でない信者

十年のキャリアが解禁日へ無口

受付の気まぐれ女の年も聞き

島根県 藤 井 明 朗

学生のデモへうなずくのも世相

不況風中に春闘うごき出し

せっかちな気性も盃はこぼさない

顔なじみ今日は保険に攻められる

竹原市 山 内 静 水

プツンと一粒噛んだゴマの味
ママさんの男嫌いにある魅力

御幣今日打出の小槌の如稼ぎ

ハサミまで研いで女房に見直され

熊本県 有働 芳仙

継ぎあててやれば風の子風に消え

女房に課長どまりとみくびられ

ペテン師のにやりと闇にすてた顔

しんみりと柩の釘はみつめられ

大阪市 木村 水洞

ベトナムの事で焚火がもめて居り

馬鹿にされていて重役ほど稼ぎ

適当に拗て甘えてへそ繰りし

家中に風邪はやらせて孫元氣

倉敷市 野田 素身郎

諦めてからは左遷の地で太り

星凍る夜道も燃えてるから二人

まだ四十前のに寝酒の癖がつき

たまに休めば父ちゃんの人気だなと子供

愛媛県 渡辺 暁童

まけたのに気づかぬ奴をもて余し

すぎた遠慮へふたつ空席

ビデオテープで恥の上塗
冬の雲君の行きつくところはどこ

岡山県 藤原 秋月

スカウトの好餌の先きに針が見え

デートの日決めるだけの長電話

身内ばかりの職場で一人孤立する

虫のよい話と気づいた頃は後手

大阪市 児島与呂志

春の色もうそこにある蕾摘む

大変な事見つけたように噂

道教えそれから間違いだっただのに気付き

どなたにも気に入られたい職場なり

鳥取市 森本法泉水

盆栽の雪を払って出勤し

猫飼えば猫には猫の理窟あり

ここもまた値上りをまつ板囲い

保身術またマージャンについて行く

岡山県 田村 藤波

土佐犬の貫録沈黙守つとり

パトロール粋をきかせて誰何せず

外出も勝手に出来ぬ人気者

心して降れよスキーヤーへ雪

倉吉市 奥谷弘朗

一筋の道先着をゆずるまい
長いのに巻かれ真相消えかかり
財産の無い気安さと淋しさと
生きてれば何とかなるさ青い空

東大阪市 森下愛論

淡雪ちらちら晩酌まで降ってほし
ミニの娘の素足に春はもう近い
辛党に値上げの春はきびしすぎ
チップすんなり胸の谷間にすべりこみ

大阪市 中川滋雀

主流からそれた自分が小さく見え
かと言って黙って居ればつけ上り
泣かされてきた児泣くなと叱られる
あたふたと食べたラッシュの顔ばかり

枚方市 宮川珠笑

仲人の人物評もしてデイト
復職へ酒はこんなにもまいもの
父ちゃんのバカバカお酒に負けている
人不足去るは追わずと云うとれず

伊丹市 小川静観堂

いつ死んでもだんないけれどもう十年

明治百年母よあなたは強かった
あの妓のその後しらずにお終いか
白い梅紅い椿の野点かな

大阪市 碑弓彦

お天氣が変らしいと地下の店
辻一つ曲るまでは酔って出る
動かない時計は一度叩かれる
旧暦で寒いはずやと孫の守

兵庫県 河原みのる

一ト握り奮発しとく産んだ朝
物洗うその川上を御存じか
酒値上げ

濁りざけ許す政党出でざるか

テレビ旅路

偶然を重ねかさねて旅は行く

大阪市 宮尾あいき

枯草の根元で若芽風をよけ
豊満な顔文無しとは見えす
本当の時間を云えと起きてこず
暖房にだまされて咲くばけの花

松江市 柳楽鶴丸

底辺の底は以外に深かった

よく喧嘩しても幸せな夫婦です
委員長になって六法のABC
処女のままの乳房で銀婚式迎え

松江市 中川晃男

美しい顔に冷めたい眼が笑い

妻の愚痴聞いてやるのもコツが要り

雪払う傘華やかに女客

雪もよう空へ我が家の棟上げる

香川県 三井酔夢

造花みつめて流感の長いこと

いさぎよく散りたい造花うらぶれし

木枯らしにバラ剪定の心意気

大雪に身を埋めたい日の怠惰

兵庫県 遠山可住

適者生存雪三尺の下に生き

売れ残りの妓にしこたま飲まれけり

おしいただいて吸うた葉巻にむせかえり

合理的くらしが明治の気に召さず

高槻市 山田季賛

まあようも痩せたとハカリへ念を押し

丸刈りにすれば腕白の子に見え

絵具皿僕へ素直になつてくれ

お隣といざご口出しせぬとする

奈良市 宮口笛生

犬までもおんなじように風邪をひき

途中下車あれから馴染みの店となり

自信ある顔で話をぶちこわし

北陸はひどい降りです貨車の雪

熊本市 楠田英子

献立をかえて冬の夜あたたまり

くしゃみして忘れた事を思い出し

春近し温室の花は散りはじめ

御気嫌をとらねば猫はよりつかず

竹原市 小島蘭幸

しゃべってる時がほんとの君なのさ

甘えたいのよと兄貴のない彼女

君と一緒に聞きたい恋の歌があり

成人式一着きりの背広です

善通寺市 岡田拳法

脈ありと見えて試煉がつきまとい

青い鳥住み難いのか逃げて行き

悩まない順にいびきをかく療舎

道遠しばちばちやるか影法師

福岡県 太田湖平

妙薬はないとて哀し五日分

仁なくば吹雪へ風邪を見舞うまい
被せかけるまた被せかける風の味
流感で参るものかと汗を出し

ハワイ 上田 紅 溪

浮彫の山近く見ゆ雨あがり
アンテナがゆがんだままで年を取り
今浦島かわらず迎う山と川
来て見れば旧友たちは遠い旅

笠岡市 木 山 要 次

がめつさもここまでくればほほは笑まれ
陽だまりをとうから猫の既得権
竹や木の釘が母の小抽出
両親が喜んでゐる口応え

宇都市 平 田 実 男

指名料だけホステス媚びてくれ
僕と子の苦手が同じ通知表
着ぶくれの中で余計に目立つミニ
一生の不作ねと見舞うたびに詫び

大阪市 川 口 弘 生

旭区医師会伊豆行

新幹線美人の隣ですぐに着き

ウナベンの箸で教える方に富士

混浴に五十女の威風あり
新幹線の奇遇はビュフェに席移し

倉敷市 井 上 旭 峯

残されて願ったようなよいチャンス
ブロックの塀が冷たい露地にする
くつろげば女昨日を捨てた貌
仕付け糸取って折り目を着せて発つ

鳥取市 藤 本 礎 山

知らぬ振りしている妻の知恵に負け
その刹那世間がうるさいからと逃げ
このままで生きるしかない五十七
妻と子の策と知ってのってやる

倉敷市 水 粉 千 翁

もて余す重さ心と対話する
うれし泣き笑いにもらい泣き笑い
サボテンのトゲをこころとする笑顔
赤坂で睨みをきかす花名刺

ハワイ 羽 佐 間 柳 葉

季節なきハワイに住んで気がゆるみ
コマーシャル損して売ってるように言う
子に意見俺も意見をされた頃

やりくりも限界に來た年の暮

岡山市 池田古心

捉えりや鰻に化けてぬらり逃げ

男への挑戦ミニの濶歩する

一滴も飲まない男氣に召さず

自嘲する早合点の手を握り

大阪市 福井多蘭子

箱根行(二句)

十国の眺め雄大の字をあてはめる

借金を忘れさせる冬の富士

銀杏のはぜるも待てず酒をくみ

やもめ かび餅貰い溜めている

宝塚市 中村ゆきを

立ち読みの続きあしたの晩に決め

指示されたとこだけやっとくアルバイト

立板に水とぼんやりとの対話

あれでいて死ぬの生きるの云うた仲

ハワイ 加川カロ

人相はただけでないがお人好し

その短氣あたら出世の道はばみ

多忙でねと言いつつながい立話

消え残る明治のすがた此処に生き

女子寮さまさま

池田市 黒川紫香

鳩が二羽寮の娘に甘えて居

三味の音とピアノが交る寮の夜

灯がともり寮だんだんと派手な音

高槻市 若柳潮花

剃りあてて男に惜しい眉をほめ

雪囲いして緋牡丹のように住み

抱くように車道を渡る老夫婦

岡山市 直原七面山

村を湧かせた派手な駈落

惚れているから憎いと女

山家の春の長閑けさに酔い

大阪市 西森花村

社務所にはおまもり駄菓子屋程並べ

日本海本番めいた波騒ぐ

浪人よりお得ですよと裏口屋

唐津市 新岡回天子

何十万コボシている金おさい銭

代理には感情はなし左様なら

出世話一けたも二けたも違うよう

倉敷市 木村長三

浄土とはここかいなあと夢うつつ

徒歩運動十坪の庭で間にあわせ

日々疎く我が影薄くほそりゆく

西宮市 若林草右

流感を婦長は飴でおすつもり

お年玉もうはずされた声がわり

うるさいカメラめと猿尻をかき

大阪市 水谷竹莊

明治百年富士は昔の姿なり

分譲地谷を越すこと書いてなし

いい空気吸えると早起き自慢する

加賀市 木村一路

若き日のゆめ夢のまま臥すベッド

爪を切るように僕の胃を切れと云う

ゴム長の穴に気付いた水溜り

小松市 関戸宗太郎

大雪予報とけて大雪らしく降り

見習いが剃っても割引して呉れず

店員が足りず高血圧下り

諫早市 川岡靈眼子

うるう年刻んで地球自転する

踏石に孤独な俚な小庭下駄

自嘲する鏡に自分の鼻がある

大阪市 今西章雅

売れ残れば焼くより手ない福俵

保険金多額と類焼疑われ

昭和元禄人生論が紙価高め

岡山県 浜野奇童

同僚の結婚を祝す

信じ合う目と目が澄んでいる船出

ベトナム戦(一句)

好きだから武装している訳でなし

いんぎんに挨拶をしてボスがくる

高石市 谷沢好祐

正月を風邪で寝込んで喜ばれ

自分から入る保険は疑われ

馬の骨ばかり寄った大都会

芦屋市 丸川初甫

お見合の沈黙庭をほめ初め

折角のホテル日帰りとは淋し

訪問着を満載してる車寄せ

宝塚市 小畠無聖

ここにも孤独な臍の穴

無造作に押され途切れてマヨネーズ

気まぐれな雲一生懸命走ってる

平田市 久家代仕男

重態の友へさよならとも言えず

明治百年それほど大切にしてくれず

棒材に繋がれたまま小舟揺れ

京都市 松川杜的

面接のドアは吸い込むように開き
聴診器お世辞の胸へむっと押し
夜更かしに目薬りが要る年となり

今治市 越智一水

富士五湖伊豆に遊ぶ

眼の辺り富士と話して小半日

青木ヶ原樹海額縁になる富士が浮き

生きている証鰓鰾の眼が動き

大阪市 福井野迷路

虫干へ去年と同じように入れ
春雨の道はやさしく教えくれ
風邪ひきがひと廻りして春となり

岡山県 横山一声

よく動く舌だ成程骨がない

目のやり場どどのつまりの腕時計

寒風に雀はどこに寝てるやら

大阪市 河井庸佑

大学人学ヘルメットも買わされる
雪見酒花見のプラン練って居り
誰れにも負けない自信はお酒だけ

奈良市 村上春巳

甘い顔見せればあれ買えこれも買え
まだこりずまだまされたお人好し

暖房の部屋でゆかたの展示会

美禰市 安平次弘道

茶柱が立ったその日の気の軽さ
雑巾をミシンで掛ける若いママ
頬骨の印象落葉焚く尼僧

笠岡市 木山遠二

おおぎょうに書かれ困っている善意

愛情を物でつぐなうなさぬ仲

浮気ではすまず女におどされる

小松市 馬場魚山

口癖のように太平洋側は晴
揚雲雀麦が少ないなと思ひ
かわいい声でズバズバと云ううちの嫁

笠岡市 松本忠三

チェーン巻いてスリッパをする零下五度

とし聴かれ目出度いと云うとして死に
歌会の被講は息がつまりそう

富田林市 川端東雲楼

本番へ教育ママの新学期

思い出のいちょうがパラリ句帳から

端麗な佳人の裏を覗くまじ

松江市 岡崎祥月

風雪豪雪俺は動めん

キャンパスへ白がなやみの雲景色

丁度ない頃に財布に入る金

新居浜市 小林孝正

嫁の肩持って老後を丸く生き

神様のような相手で肩が凝り

二度と踏まぬ氣の故郷を踏む出世

出雲市 原独仙

風邪こじれ玉子酒など受けつけず

晩酌の切れたを詫びる熱いお茶

平凡な日々に炬燵とテレビあり

守口市 羽原静歩

筆談の媼に光る猫目石

この俺に海の氣迫が欲しいだけ

箱根からカメラ呆けた顔になり

大阪市 天正千梢

石畳あゆめば歴史が抵抗し

故郷の山あやまちもほめてくれ

ライバルと思えど距離のありすぎて

和歌山市 西尾公作

消しゴムの消しあと妻に見破られ

頼母子の満期始末書に化けちまい

臍くりがたまったか妻さからわず

鳥取県 森田布堂

豚の貨車吹雪の駅を啼いて発ち

川底に春を見つけた藻の芽立ち

定刻に来たのはみんな飲める顔

富田林市 岩田美代

虚しさへ妖しく光る寒の星

言い負けて帰る寒風に背を押され

何も彼も忘れる覚悟髪洗う

大阪市 室谷鉄舟

整形の以前の顔で生れて来

もうあかん云うてる方がようけ飲み

悪友の胸に一物ある土産

姫路市 隠岐不醉

詮衡員慎重審議が五分間

焼鳥屋今日一日の憂さ晴らし

僕などは以下同文で名を呼ばれ

富田林市 浅川 八郎

神経が細くなつたと娘にいわれ

廻転率とてもよかつた再入院

求人難わかつてほしい患者達

大阪市 西川 誓二

残月を消すかのように夜がしらみ

言うことが判れば出せとまた凄み

午前二時夜光の文字の青白さ

泉佐野市 大工 睦夫

一区切土曜の朝の勇み足

冬枯れの雀米屋の朝を待ち

手不足へ一人赤シャツ紛れ込み

大阪市 宮地 双楽

大馬鹿と悟り開らけた今朝の夢

面接を待つ志望者の眼のやり場

電柱の無い町燕も戸惑いし

和歌山市 土谷 城石

仏壇も巻線香で放つとかれ

言訳にちゃんと入浴して帰えり

孕ませて言訳なんてきいとれず

病室で窓巾だけの雪景色

待つ人は降りずにバスは発車した

たきすぎた風呂花嫁はやせがまん

堺市 青野 遊仙

ノイローゼ求むる心多過ぎる

急病へ無医村に似る日曜日

踏み切れぬ弱さ我が俛かと思ひ

鹿児島県 土岐とく子

島育ち騙したようで騙される

屋久島の見えるあの丘夢の丘

流行のミニも泣いてる六等身

鳥取県 清水 一保

もういいかい雪の下から春がよぶ

生活の知恵よりかせぐ知恵をつけ

京都府 清水谷 句楽坊

豆かんで心の内の鬼は外

影で泣く仏尻目に寺宝うり

八代市 永松 道雄

猿知恵を借りて舞台の人気者

グイグイと追越す駿馬の鞭の影

加賀市 細呂木 魯木

露骨さへ伏字の本がなつかしく
雪明り何か出そうな河の色

岸和田市 上林加仙

節分の豆が戦時を未だ語り

三申を真似て社会に立おくれ

泉大津市 高津徹也

春の芽へめでたいことのある家庭

鏡台と一緒に年をとっていき

米子市 石坂新雪

銀婚の妻は安心過ぎて老い

ほどの酔が解った五十三

堺市 新谷笑痴

松本吉太郎氏祝全快(二句)

全快で見た葛城は日本晴

強情の一角くずれて吐いた泥

北川春巢

薬つかむ気の漢方が効いて来た

歯の治療するひまもなし宮仕え

定退は年次休暇をなつかしみ

天下り融通の利く顔になり

流行を追うではないが風邪に臥る

メキシコにて

国の歴史訊けば悲しき四百年

貧富の差見せて街の子はだしなる

アメリカにて

アメリカの恥部まざまざと黒人街

大都市の暗 黒人の娼婦佇ずむ

ケネディの偉大さ永遠の火と共に

菊沢小松園

ダイヤの冷たさ肉身を寄せ附けず

よい加減にしといて来いとあの世から

プラモデル子供元来軍機好き

かきくどく恋を聞いているがらすごし

出稼ぎの人もあろうに差向い

清水白柳

赤電話待つ手の銅貨もてあそび

笛吹けば壺より出るは原子雲

千羽鶴釣る押ピンも持つ見舞

川村好郎

ふてくさる心の奥がいとおしく

春近し決算期も又近し

願うより願われている掌を合せ

愛嬌を売りつくしたか終電車

若本多久志

山中節こころで梅里唄うとこ

西尾 栗

孫が来て碁石がたりぬ駒がない
またしてもタイミングのあわぬ妻の酌
俺は独酌妻は家計簿差し向い
送られるよりましやと珠数を渡される
会葬の帰り死んだらあかん酒を酌ぎ

生駒町から

野も山も霞み山吹つづく道

さくらん坊おとめ心をギヤマンへ盛る

ホンコンフラワーなどと思えぬ軸の前

鳥が鳴いた花が咲いたそして私の世も終る

一寸先はやみと思うて何になる

朝あり夕ありチョッピリ人のためにもつくし

朝の雀がまだ耳につく生駒町

中島生々庵著

川柳講座

大阪府医師会の機関紙である大阪保険新聞に18回にわたって連載され、路郎、三太郎、水府諸氏の名言などもあつめ、初心者用に執筆されたものである。

★郵券五十円封入の方へ一冊進呈。申込みは川柳塔社へ。

麻生菫乃

とんと共に情熱が失われてゆく自分の姿は
あたかも死火山と云つてもよい。休火山ならば、
また噴火する事もあろうけれど、夢にも
それは望まれない事である。気持ち若いか
らと云つて、若い句を作っても、人から見れば
それはリアルであるとは思えないだろう。
老人の句はもはや金米糖ではないのである。
金米糖の角が磨滅した一塊の砂糖なのである
が甘さには変りはないと思つて作句している。

川傍柳 初篇研究

(五十八)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須唾三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

四 いちどきに百宛笑ふいゝ女

一 甫

川端 不詳。

高須 長恨歌の「一笑百媚生」の柳化と、

花月翁説あれど、ただそれだけか？

前田 不解。百蔵（百文の卑媼）が集団で

一度にどつと笑ったのが、罪がなくてよか

ったので、いい女といたのであろうか。

岡崎 浅草二十軒茶屋の女が百文の茶代に

愛敬をふりまく。

二十軒一ト度笑めば百とれる

清 岡崎説贊。この茶屋の女達、茶代の多

少によってその待遇を異にする。五文や十

文の茶代では相手にもしないが百文も渡す

とその態度をがらりと変える。客種は浅黄

が多い。

藤井 いちどに笑ういい女だから浅草二十

軒の女はうごかぬ所、なお百すつ笑うがよ

くきいてる。百文以下は鼻もひっかけな

い。一般料金、スペインアルはお金次第いく

らでもの意。美女の誇りがましい顔が小面

にくい。佳句。

丸 岡崎説贊。「いちどき」はいっしょの

意味ではなく、一度の意味であろう。

岡田 小生は高須氏が引用された長恨歌の

「一笑百媚生」説。すなわち水茶屋の女に

限らず、美女の媚態を表現したものと思っ

ている。

四 雨舎五人で蕎麦を忝くひ

梅 枝

川端 俄雨で雨舎（あまやどり）の句。軒

先を借りて邪魔がられたりするので、気の

合った者が五人蕎麦屋に入ったが、金が足

りなくて二人分しかない。仕方なしに五人

で二つ注文したという金の持ち合わせがな

い点、俄雨らしい風景である。「銭あれば

濡れまじものを俄雨」。

高須 今ならば「一杯のコーヒでねばる雨

宿り」である。

丸 岡田 贊。

四 松の内尻りの丸イを忝まじ

用 弓

故

高須唾三味

丸 十府

岡田 甫

川端 正月は武士・町人を問わず、それぞ

れ礼服を着用して年始廻りをした。その際

町人であっても、富裕な者は麻袴を着して

脇差を帯びた。年始礼の風景である。

高須 年始廻りには違いないが「尻の丸い

を」で真鍮巻の木刀を差したことを示して

いるので、雇われの供侍のことであろう。

松の内股立て来るぼていふり

松の供譜代恩願のつきやなり

なという類句もある。

丸 同。「ばかされたやうに日雇忝まじ

し」(三・七)

岡田 贊。

四 よわそふな形で敵を討に出る

長 笑

川端 「弱そふな形」は男装。親か兄弟を

討たれた娘が男装して敵討に出かける姿は

悲壮であるが、やはり女は女、いかにも弱

々しい。それにくらべて相手は悪役ながら

偉丈夫、女の手で本懐が遂げられるかどう

高須||男装とまで考えず敵討に出るのが色白の優男でいかにも弱そうだというだけであらう。よく「川柳は短篇小説よりも長い」というが、この句もその一例。ひきのばせば長い大衆小説にでもなる。

丸||高須説贊。討った方は悪者で、悪者に容貌かい偉腕も立つ、討たれた遺族の方はそれに比べて弱々しい感じがするのが人情か。

岡田||敵討のため回国するのは日数も旅費も大へんのため、主として虚無僧となり、尺八で門付けをしておせきながら廻ったもの。「弱そうな姿」はその表現と思う。

478 中に化物がいますといかけい、

眠 狐

川端||「いかけ」は銅鉄の鍋釜を修理し、ふいごを持ち歩いて即刻修理してくれる。天秤棒で前後に荷をかけ、お宮の森のような涼しい所に陣取って、そこから一軒ずつ廻って穴のあいた鍋釜を集めて来、やわら仕事にかかる。後で修理の出来上がったのをそれぞれ配ってゆく。香気な商売であったため「鍋釜掛すってぺんから煙草にし」(初・この)のような句がある。「化物」とはフイゴはムジナの毛皮で出来ているので化物と冗談を言ったのであらう。

高須||礎稿のように吞気らしく仕事をしているので、どうしても子供に取り囲まれる。それでフイゴを指さして、この中に化物がいると、子供達をおどしているのである。

フイゴの中はムジナの毛皮で空気の逆流を防ぐようにしてあるので、それをイカケ屋が言っているのである。

鍋釜掛子供に水を取りにやり 一六・31
ちんぼこへ火がはねるよと鍋釜掛一四・12

丸||子供のとくによく、これに類したことを大人から云われておどかされ、真にうけたものだった。大人の言葉を子供は案外ほんとは信じてしまふ。

丸・岡田||贊。

479 いいよふにいへとい、く猪牙へ乗

柳水

川端||柳橋から吉原へ遊びに行くところであらう。

柳橋出ると一かぢぐいとやり 八・13

「いいよふにいへ」とは船宿の人に云っているのか、供の者に云ったのか？

高須||船宿から猪牙に乗る人が「家にはよいようにと言っておけ」というので、もちろん供の者へである。

藤井||「いいよふにいへとい、く」が、心は吉原へとくに飛んでいる所がよく出ている。供の者の心配を振りすてまた今日も。佳句。

丸・岡田||同。

480 口おしくなひ虚無僧の面白さ

一 甫

川端||虚無僧は、たびたび出てきたように仇討ちに変装して門並に探り歩くには最適であるが、これもすべて他人の仕業が原因

して、当てのない仇討の旅であってみれば苦勞の連続であるから面白い筈がない。この句の場合、「口惜しくない」から「面白い」ので、ほんとうの虚無僧であらう。「虚無僧は貰はいでもの姿なり」のように、服装もよく人の門に立つ姿でないから、本物の虚無僧は面白いだらうの意。

高須||「本物の虚無僧」というのではなく「仮装の虚無僧」か「尺八道楽」のことを口惜しくない虚無僧と云ったものと思う。

一文は取りそうもない形で吹き(二・17)藤井||仮装でなく尺八道楽の虚無僧ととり

丸||とにかく敵討という執念のない虚無僧岡田||贊。



すばらしい
着心地
蝶 矢
シャツ

HCHOYA
SHIRT CO. LTD.

川柳明治百年 (一)

明治篇・大正篇

清水白柳

今年明治百年に当るといので、マスコ

ミを通じて私達の眼に耳に、明治の頃のいろいろな事柄が飛びこんで来る。それに刺げきされたわけではないが古い柳誌を読んでいううちに書き抜いたものを明治百年らしく並べて見たいと思う。明治篇、大正篇、昭和篇と分けた。明治篇は、大阪で発行されていた柳誌「三味線草」の昭和八年十一月号ののっているものの転載である。

明治篇

(三味線草より)

井上剣花坊氏が「日本及日本人」第二百八十四号、昭和八年十一月一日発行、明治節記念号に掲げられたものである。(註◎印のある句は、剣花坊句集に「明治節九章」として載っているもの)

明治懐古川柳四十九章 井上剣花坊

明治 元年 鳥羽伏見役
鳥羽伏見でんぐりがへる関ヶ原
天皇御即位

◎紫宸殿地球儀を御ン踏まへ

明治 二年 新聞紙刊行許可

◎耳と目と口を自由と御ン許るし

明治 三年 郵便開始

一枚の切手飛脚の二本足

明治 四年 廢藩置縣

◎牧民に封建の垣取り払ひ

明治 五年 海陸兩省設置

敵然と陸に砲台海に艦

明治 六年 征韓論決裂

文に武が負けて将星西へ飛び

明治 七年 佐賀の江藤乱

韓彭は煮られ商鞅捕えられ

明治 八年 千島樺太交換

小魚を遣こし大鮭引ッ浚らへ

明治 九年 萩の前原乱

小さく咲きせまく散り布く萩の花

明治 十年 西南の役
西郷は熊襲反すの掉尾なり
鮮血に山は紅葉の田原坂

明治 十一年 大久保暗殺

佐賀猫の因果はめぐる紀尾井坂

明治 十二年 琉球廢藩

琉球を日本盗むと言ひ触らし

明治 十三年 国会開設請願

我に国会を与えよ否らずんばと騒ぎ

明治 十四年 国会開設大詔

叩けよ開かれん十年待てとこそ

明治 十五年 朝鮮暴徒我公使館を

かまきりの斧は亡びへ穴を掘り

明治 十六年 徳島事件

サーベルを抜けば構える仕込杖

明治 十七年 朝鮮~~二~~我公使館を

めんどりのすすめ日の出へ目をそむけ

明治 十八年 大阪事件

大阪の壮士芝居にカラ人気

明治十九年 鹿鳴館外交

○赤くない毛と碧くない目を敷き

明治二十年 保安条例

いつぱしの芸人氣取りへ江戸構え

明治二十一年 大同団結

入閣の踏台つくる頭数

明治二十二年 憲法発布条約改正騒動

○御目出度い年に恒喜と文太郎

明治二十三年 帝國議會、教育勸語

日比谷池蟹や蛙が鳴きはじめ

堂々と大帝國の大勅語

明治二十四年 湖南の変濃尾の震災

近江から荒れて鯨の美濃尾張

明治二十五年 弥次の選挙干渉

○腕づくは金づくよりも罪が無し

明治二十六年 条約勸行論

先キが先ならこつちでも証文通りだと

明治二十七年 日清戦争

勝ち放し勝負にならぬ勝負なり

明治二十八年 三國干渉

豚狩りの山に獅子虎豹が居た

明治二十九年 広島島の獄

○王宮の修羅の巷へ珠数を採み

明治三十年 布疋問題(谷米外交)

○軍艦を布疋に寝せて妬が付き

明治三十一年 限板内閣

ステッキ兵児帯で貴賓室へ坐り

明治三十二年 条約改正結了、内地雜居実施

唐人が日本キモノでメシを食い

明治三十三年 清國義和團事件

強がったにぎり拳で支那は負け

明治三十四年 星亨暗殺

星落ちて帝都の霧はまだ霽れず

明治三十五年 教科書疑獄

先々たる者へ続々縄をかけ

明治三十六年 対露同志会

風楼に満ちて霜夜に剣を研ぎ

明治三十七年 日露戦争

どたまから旅順を脅す飛道具

平生の演習を見るが如し肉弾白礮

明治三十八年 外交不満帝戒嚴令

バイカルのつもりサガレンでは不満

焼打は鮭の片身の不満より

明治三十年 韓國統監府

日本府の歴史毛唐共知らず

明治四十年 ブース大將來

○社会鍋くらいで貧は救はれず

明治四十一年 戊申勸勤

花紅葉浮かれ調子へ風と霜

明治四十二年 国技館建つ

これよりぞ相撲亡びる国技館

明治四十三年 日韓併合

大日本國民にして長煙管

明治四十四年 日本權開通

ライオンと麒麟で護る日本橋

大正篇

大正篇は「川柳鯨鋒」「大正川柳」「雪」

「柳太刀」「絵日傘」「土団子」「後の葉柳」

「川柳上方」「川柳小康」「落標」「井上劍

花坊句集」「句集加良怒」「桂馬」「川柳雜

誌」等、手元にあるものから書き抜いたに過

ぎないので片寄っていることはお許し願いた

い。まだまだ書き加えたいのだが一応まとめ

て見たものである。

★ 明治四十五年七月

明治天皇崩御 (劍花坊句集より)

二重橋元のあとの草の色

大正元年九月

乃木希典殉死

新坂に武士道未だ地に落ちず

大正二年

新年を迎えて

あめつちは涙の中に新たなり

縛られた奴も喪章を付けている

番傘創刊

上かん屋へいへいとさからわず 当百

大正三年

慶喜公葬式の号外

冬枯に江戸を葬る鈴の音

大正四年

カイゼルは寝言にまでも講和なり

御即位記念

三時半あたりの声振り絞り

戸籍半の又かと記す悠紀、典子 卯木

嫌いなが八千代に咽せるお目出度さ 美ヶ月

御大典儀兵式を拜観して 「大正川柳」 大吉

咳一つきこえぬ中を天皇旗

劍花坊

大正天皇御大典

南洋に面して据える高御座

劍花坊

飯せし人々に

路郎

白粉を洗い落せばさびしからんに

路郎

大正五年

妻に中将湯をのめめという寒さ

路郎

果太鼓今や鰻を裂かんとす

日車

新美術部

〔川柳號録〕五月号

三つ越の五階夫人は素通りし

久良岐

曾我婆家

笑い止む頃蝶六は染屋なり

水府

大正の五郎十郎笑はせる

好風

大正六年

白瀬中尉立候補

柳阿弥

選挙民ペンギン鳥と見くびられ

柳阿弥

支那の排独

無尽帳遠い親類逃げをうち

柳阿弥

連鎖劇

大久伸百もした頃連鎖なり

爵水

〔柳太刀〕一号

赤帽に同情される空模様

青岸

大正七年

米騒動

〔川柳號録〕九月号

外米の弁当隅で箸をとりに

大吉

大一座台湾米の反吐をつき

大吉

米一撥片付く頃を感冒騒ぎ

桂雨

今買った夏帽で行く戎橋

南北

〔給日傘〕二ノ三

勘定機あいつもコーヒだけで去に

艶笑

〔土団子〕三号

米の騒ぎに物忘れする夕也

路郎

安治川を巡航船が逃げて行く

水府

大正八年

噫 松井須磨子

〔川柳號録〕二月号

盛装で死に行く人の美しさ

春雨

七草の囃いの中を棺の出る

同

同じ日に死んで同じに葬られ

同

〔註一月五日須磨子自殺〕

〔柳太刀〕一七号

院線に乗れば筑波の朝霞

美の作

〔註鉄道院の時代〕

〔後の葉柳〕一号

もちものうちで頭が邪魔になり

あきらめをもつ花嫁のしんし張

大正九年

〔大正川柳〕九月号

国母陛下東北地方へ初めての行路

猪代湖畔に御滞在 八月十四日

雑音に天の岩戸が細く明き

五花村

〔大正川柳一〇〇号記念号〕十一月号

万龍はいつ迄若い絵はがき屋

金一郎

孔孟の国で東夷の貨を排し

劍花坊

〔川柳上方〕六月号

下宿屋は下駄箱を見て留守を言い

割箸を飯屋は下へ拭き落し(七月号)

結果の朝に判取帳揃い(十月号)

眼屋に頭をけられそうに見る

出雲屋で提灯火元尋ねられ十一月号

大臣の癖を一平見て歩き

大正十年

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6951
守口出張所 守口市京阪本通2-18
三洋電機本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

〔大正川柳〕四月号

金栗に聞けばマラソンむづかしい

困難に先立ち生活難が来る

へいたいも巡査ももつともだと思ひ

劍花坊

〔註 大阪天六での事件〕

〔柳太刀〕五月号

松之助手品のやうな芝居をし

〔川柳上方〕三月号

三等に乗るは押込められるやう

辻便所荷物に見えるとこへ置き

大本教風わかしたとは言はず 馬行

大正十一年

〔大正川柳〕三月号

賀川豊彦を知っている行倒れ 破魔杖
三越がはっきり見える九段坂(九月号) 維想楼

(十一月号)

キレー紙で丹念に拭く総入歯 盗泉

〔柳太刀〕七月号

年棒を米になおすと五十石 鞍馬

大正十二年

〔柳太刀〕二月号

職人に負われポッペン買うて来る 紋太

〔川柳小康〕二月号

凡人となれ一つ捨て二つ捨て 日車
友達ともい言わぬ日を早く臥て 紋太

四月号

下駄替へる程の横着気も持てず 雅楽頭

五月号

あとはみな他人にふれる風呂の水 蹄二
牛の背に日輪様の秋のいろ十二月号 半文銭

捧 有島武郎先生 〔大正川柳〕八月号

人間を見捨ててる力快し 太郎丸

恋ふと云ふ事に最後の怪一つ 同

〔大正川柳〕十月号

下町を武蔵野にして遷都説 剣花坊

わがうちの焼けるのを見て山に寝る 同

〔大正川柳〕十二月号

菊月の二日このかた乞食なり 剣花坊

焼跡の銀座通ればゆであづき 同

〔川柳露橋〕二七号 十二月号

十二月考える間を叱られる 夢路

間違ひの電話で子供起きたきり 義矢満

菜湯で子にアルプスを教へられ 川流

例のどこへ行こうと非番髪を分け 物外

路郎

大正十三年

荒涼の春 〔大正川柳〕二月号

東京に半分鳴らぬ除夜の鐘 剣花坊

小便と時計で駅に用があり 同

踊子へ雲でも降りて来そうなり 路郎

御名御覽濟むと一同咳をする 千歳

一月の二十六日日本晴 扇子

空ちうの焰の下で朝を待つ 維想楼

一年をまだバラックの年回忌 剣花坊

向う岸灯のついたのではなほ淋し 信子

惜しかった筆筒今でも鍵を持ち 美水

三越の灰へ集まる浅ましさ 鞍馬

グラグラと来ると綾部でそれ見たか 竹芝

芸術かのこり沢正 松之助 同

灰掻きに来ない隣を淋しがり 同

巡回の大工を見れば齒入れなり 竹馬

東京に道玄坂で廻り合い 雀郎

焼残りこれも貰った事にする 同

絵葉書屋脇の下から一つ売り 同

焼土の下から芽ぐむ江戸の春 久良岐

悪い事大本教が言い当てる 同

大正十四年

物題 山色連天 剣花坊選 〔大正川柳〕二月号

若駒の目あては雪のあるところ 幾子

航空母艦赤城名式所感 〔大正川柳〕六月号

この艦の役に立つ日を悲しみぬ 麦村

但馬震災 〔大正川柳〕七月号

城崎へ行けぬ貧乏うれしがり 万よし

大正十五年

〔大正川柳〕七月号

抵政宮殿下奉迎 同

不景気をひっくり返す奉迎日 晴夢

人通らない踏切のベルが鳴り 〔川柳桂馬〕十一月終刊号

東洋鬼

色紙短冊
書画用品

大友成徳堂
丹書堂
電南セニセニ

太 紋 元 相

家殖えて駅前ひろげますという
狭まい部屋齒科医ひとりよく儲け
又暴はれてる大学の子に思案
胸すつと車をよけた子を眺め
ホームラン二へんめ敵と味方なし
死ぬことを医師のいちごん言えもせず
ほく今日はとんぼ一びき見つけたよ
おやすみと寝るあいさつにウン休め
商売に大阪ことばよく通じ
井戸ばたのこともなう遊んでる
綺麗な娘 嫁入ってから無事なこと
しゃっくり人形にっぽんで生まれ
又会うてにっこり忘れちゃいやですよ
団地から団地へ小鳥逃げて行き
陰口できくほど家主こくでなし
巻ずしを今日はこれだけ余計食へ
塩こんぶあげます親類より近い
前歴は油屋今のん売りに来ず
母親が好きだと顔にかいてある
南洋へ出てあぶながらずそのまま
頼まれてときどき留守の隣りを見
貧しい子今もあるだろやけに泣き
太鼓やき売って老男老女住む
会うて別れて又会わぬひと多し
おっかさんお留守で宅の子と同じ

社会面ぞろりとひろげ泣きません
身体ごと親切見せてものを編み
きつつきの梢にいるを人は見ず
驚ろいて見せて子供に大あたり
中風に雨を云わずに忘れて寝
鬚面を見せたり見せなんだり長病
新こよみほんに夫婦のはなしあり
包ませるものほって行くお釣詐欺
唄もなく一生芸はなく通し
飛行機か船か旅と聞きあんじ
知れたこと命永かれちちをのむ
午前四時たっしやで寝てて知りもせず
はい自由ですと放れた亀はやし
この頃はみそかかまわす旅に立ち
子の多き黒いバナナに無理云わす
この人の前でおのずとしゃちこばり
かどの家変わり三等局が出来
ボーリング巧いねらいで割って入り
生きていた証拠に五年目に出会い
お手のものだけに新駅りっぱなり
キャラメルがうまいか老いの口うごく
休んでる店あり風邪が流行ってる
いさかいがやんで中風ただ生きる
飲まぬ筋とつても遊びぎらいなり
よくしゃべるひと道問うて家尋ね

近詠百句

寝が足りてまず見まわした部屋わが家
人それぞれに国ありて自慢めき
してみると貴君もやはり運不運
さあこいの構え永病み作句する
交通停滞の真つ最中へ医者うかつ
緊張によしと往診来てかえる
墓場や墓のみち二人なんの話しせず
ピニールふくろに金魚の鼻痛たかろ
今こそ我がこと 目をさらに横断路
交通につけて大正明治出る
このへんに琴やがあつた聞いてみる
人混みで塀越し咲かせ住んだ家
ナメコとて湖水たずねて人がくる
大工する編物よしで気はまさり
わたくしに云うとき親しいアクセント
会計に一礼うれしきみせて行く
二食主義じつはそれだけ朝寝する
ただ祈り孫マゴまごの育ち見る
うまいもの買うて市場の妻を待ち
何かつぶやき看護人にも疲かれ
体操のきちがいですと我れを云う
エンジンのうなりの中に人がいる
最終にしりのポケツを探がすなり
間違うて肩をたたいて詫びをする
私には故郷なしお生まれはと聞かれ

メートルにくわしく育ち土地を見る
空襲を遠くのことと思う子等
遠足へ天気図の欄読んでいる
ジャムとあん子供が残す方をとり
干物屋の横に先生の家わかる
恢復は手間どり腹の立つ時間
自分であきれるうどん腹十日の日
世にも無口居るも居ないも同じこと
こどもが時間問いに来る同じ長屋
商売が特別お好き支店ふえ
そう見えてすこし位いは惚れたやろ
病人に内緒でテレビ見てしまひ
父に似なわずかな努力惜しむ癖
面壁の途中 何度も用が出来
受け流しするに男の意地が出る
派手なもの建つなどうやら中華そば
リプトンを紅茶でしようは当ったり
気になってならず祈らず乗用車
正直さに惚れなんども太鼓判
まだ生きている印なるひげをそり
朝から灯をつけ銀行のようだねえ
名の起源菓子屋は好きな事を云い
やめ暮らし人は自由さ云うてすみ
穏かが好きで生涯なにもせず
ベトナムは人か鬼かでまだやるか

秀句鑑賞



後藤梅志

さい銭は箱をくぐつて元の金

(甲吉)

「金」というものは、蓄れば蓄るほどきたなくなるといふ。神前でもその通りらしい。賽銭箱の底に音のするあいだは清らかながやがて銭勘定を始め、銀行員の手に渡る段になると、あととどんなことになるのやらかわらない。浄財変じてたちまち俗銭になる。

昔一銭だった賽銭が今は十円。千倍である賽銭を値上げしたのは参詣人だが、神様も一と役買って居そう。何がそうするのか、それが金の流通性であるゆえんで一般物価の値上りもそんな順序でふくれ上がる理屈だ。この句は軽妙に賽銭箱の底を洗って見せ、人をしつうなすかせるものがある。

意地悪だけれど美人に育ちそう

(きさ子)

句からうける感じではご本人は、まだ幼稚園か、小学校に通っている子供のように見える。気が利いているが、いけずなどこのある近所の子供によく見かけるおませな児だ。

美人には、生理的に恵まれた美人と、理知や品性からくる均整美の美人とあるが、この児は後者の方だろう。親が世話を焼かないでもなんでも自分でする。オカッパのうちに男の子を泣かせたりするたちの悪い児だが、そんな子が年頃になるといつの間にかおやっと思ふように変ってくる。よく見掛ける図だ。この句の作者の目が肥え捨て難い味がある。

パツパツと金を使つて恋たのし

(蘭幸)

なんとも羨やましい句だが、作者はそんな生れつきなだろう。昔から「色男金とちかはなかりけり」といふが、いまはそうではない。金もあり男もよくて運がよいというのが一つの条件らしく思われる。恋というものが女に好かれることが即ち恋と結びつけられ勝ちだが、この作者は元来賢い。案外恋の深入りはしそうなない。あつあつになっているのは女の子の方だけだろうと、よけいなことを考えた。実はそうしとく方がこの句は面白い。わるく思わんで貰いたい。

レジスタンス休業の札かけて寝る

(花宵)

正月で、せつかくこちちが休みたいと思うときでも意地わるくお客は次ぎ次ぎとくる。

腹が立つが、お客は馴染みをいいことにしてしつこくなる。段々お客が立て込んで来て、半分休みのつもりで店を明けたのが、こちちの予定をフイにされたという話がよく聴く。そこでこんどはレジスタンスを起し、忙しそうな日にボンと休業の札を出すという寸法だろう。作者の日常が分り、面白い句と思つた。思つた事は何んでも句にするがいい。あぶらが乗ってくると、皆、筋が通ってくる。

メキシコへ走る機械となりおおせ

(清生)

マラソンのアベベが走れる走り方を見てみると、全く機械の様に足が動いている。べつにアベベには限らぬが、この頃のスポーツは段々キカイ化して来て、人間の国民性の強じんさは見られなくなった。元来スポーツは遅くましい人間力の、強化をはかるべきなのに、それが無視されて、一にも二にもタイムに合せる。元来バネの活用は外人の方が上なのに、コーチの頭がどうかしているのである。この句、見落し易い句だが、理外の理のあることを示唆した、するどいところある句だ。

此の職も一代かぎり百舌が鳴く

(三林坊)

実感句として、この句は頂く。この頃後継者の無い話をよく聴くが作者はどんな職業の人であろうか。この句は、他人の心理を忖度したものであるなれば何等価値はない。ただ下五の「百舌が鳴く」にふれると、これは「ながし」の呼吸で、わが心の悩みを百舌に転移させた賢明な締り方である。

だから主観の句として鑑賞する場合にのみ、
実在する百舌は主観句を裏付け。架空の場合
は、二重人格ともなつて惑わすばかりである
鑑賞子は、架空な想像句はとらないう主義だ
から、特にこんなことにもふれておく。

一家団欒あかぎれの手入れもし

(遠 二)

囲炉裏をかこんで、息子夫婦も居り孫も居り、めいめい灯影を映してゐる中に老人は、あかぎれの手入れをしてゐる。日本の農村のむつまじい夜を描いている。この老人はまだ百姓仕事を捨て、若者にまじつて、負けずに働らいてゐるように思われる。

昼は百姓仕事か庭いじり、よるは川柳を作る達者なお祖いさんだ。句は生々している。

餅つきにカナカ土人の手も借りる

(快夢起)

ハワイには餅屋さんは無いので、めいめい餅つきをする風習がのこつてゐるハワイという土地は、日本とは切つても切れない土地だ。いま沖繩ではヤッサモッサもめてゐるが、アメリカの本土に近いハワイに、この句のような風景があるかと思うと、うれしくなる。二世、三世が餅をつき、カナカ人がこねどりをするところなど、写真にとつておきたい。

病床の我火の如き我ならず

(一路)

水府さんと電車で会つたとき「いまいい作家は大抵薬瓶を下げてゐるんですよ」と嘆いて居られた。十年ほど前の話だが、どこの療養所にもいい作家が居る。

句は、腹の中から吐き出した句がいい句になる。この句は、衰弱した体よりも、うつほつたる野心の方が目につく。粉飾がなくて、却つて句に生氣をあたえる。この句、秀句、ひよつとするとひよつとした患者の死

(野迷路)

これはお医者さんの句だ。

病名は分からないが、或はガンかな。「ひよつとすると」とは腹で思つたことであつても、医者としては責任を感じただろう。しかも、天命というものがあつて、これは医者でもどう仕様もない。医者というものは、よほど高い治療代でも貰わねば間尺に合うものではない。と思われる。こつちが命を削つてゐるようなものだ。

達観した作者であつて、こんな句が詠めるものであらう。軽妙で、ズバリとした句だ。

かく耐えて生きん樹氷のシルエツト

(著 居)

この句は、樹氷の美しさを讃える句ではなく、霧氷に包まれた樹そのものに、同情の目をそそいだ句だ。零下一〇度ぐらいにはなる酷寒の中に、霧氷は花を咲かす。その如く自分も、何事にも耐えてみようという。潔きよい句だ。それにしては下五の「シルエツト」が弱いような気がするが、これがこの作者の好みであらう。作者の気持の分かる句。

燃えている炎の外にある正義

(美巳代)

「燃えている炎」というのは恋を指したもののように思う。乙女心の、それもはげしい

気性の、作者らしい表現だ。しかしながら、そのそこには正義、人問の苦惱が表現した。作者らしい良さがあふれる作品。正義とはなんだらう。世の掟と、一応鑑賞しておこう。少し私には手がな作品だが。

ゆるゆると月ゆるゆると陽登るなり

(笑 子)

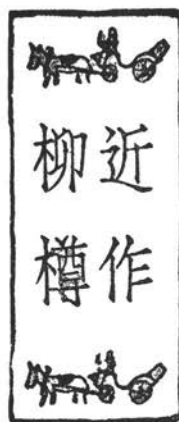
この句はたけはらの作家群の中にあつて、一般の句風に似合はず、飛抜けたところのある句風を示した。どうしても高校を出たばかりの作品とは、思われなかつた。私には、いい意味のショックだ。句意は云う迄もなく、月も太陽も、ゆるゆるとのぼるといふだけの句だが。大きな自然の営みのなかで、人間の如何にこせついでゐるかということに、対照を求めたもの。実に、雄大な感にうたれた。「ゆるゆると月ゆるゆると陽」が抜群。

川柳塔社常任理事会

常任理事会が三月四日に開かれた。昨年の夏ごろから、たびたび慎重に審議されてきた本誌の値上げ問題が、いよいよ具体化され、五月号から二十四値上げにきまつた。諸物価高騰とはいへ読者の皆さんにご迷惑をおかけすることになるので、ここまで耐えてきたをご賢察願う次第である。

出席 白柳、水客、好郎、生々庵、形水、
文秋、栞、一三夫諸氏。 一八時閉会

(故梅里一周忌句会は六月二十日に決定)



若本多久志選

姫路市 前田 芙巳代

花愛す心へ憎しみ閉じこめて

背ききって愛の傾斜に耐えている

ささやかな謀叛山茶花に朱がまじり

だしぬいて女の嘘を見てしまい

この憎しみが続けば愛を認めよう

東大阪市 坂東 若芽

一つぐらい内緒があつて生きる幸

やわらかい春よ柳の芽は女性

賛成も反対も可 父母の愛

嬉しさの涙勿体なくおさえ

半てんの目立つつ汚れへ春の音

広島県 岩谷 二三枝

地に還る枯葉は燃えた過去を抱き

雨静か冬の溶けゆく夜をきく

帯解いて女素顔にかえる城

愛憎の死角女に畏が待ち

女ひとり生き抜くための女すて

大阪市 小谷 葉子

掌に花芯を残し人遠し

世をすねた心消えゆき人を恋い

手の冷えがにわか恋し亡母の胸

もがいても もがいてもツラ下になさがるのみ

野百合一輪 女の城をみたすのみ

竹原市 三宅 不朽

墓碑なれど親子といゆうはあたたかし

故郷の間風さえ懐かしく

ライターで点す灯明とはかなし

春だから花屋の花をうたがわず

島根県 小砂 白汀

見つめられ睨られまれモデル稽せほそる

命までやった女の背が曲がり

本能を受胎調節がゆさぶる

銅像にされて風雨に媚を売る

米子市 八木 千代

まないたのくぼみに亡母はまだ残り

温かい巢にめぐまれて羽搏けず
幸福をかわして過去を忘れかね
喜寿過ぎた母に女としての櫛

仙台市 平野光道

子のための乳房を胸に子なく老え
野良犬にみちのくの雪きびし過ぎ
やりくりを頭に夢のない夜明け
へつらいを知らず孤独へ陥ちてゆき

羽咋市 三宅ろ亭

おれの中に二つ三つのおれがあり
予定日の娘の便り三度読み
争わぬ男に墮して五十七

禁煙を家族続かぬものと決め

大阪市 江城功雄

みじめなる距離よ平行線の愛
新雪へ愛迫るごと椿落つ
歩調乱れる時友情崩れ去る

大阪市 奥川継之助

しあわせが耳にも光るものをつけ
休日はぼんやりしてなさいと妻
冬木立ぬくし小さな愛まもる

姫路市 大久保大夢子

かたくなに育ち孤独を憫れまず
散ってから落葉カラカラ何処へ行く
おぼろ月最短コース帰るだけ

八尾市 宮西弥生
スタミナをつけて日曜もてあまし
聞き流す耳ありみんな円るくいき
低気圧らしい障子のしめる音

大阪市 和田痴亭

風雪にやっとかち得た補査の椅子
アイシャードネオンに不倫のかげやどす
暮しむき話して借りる意気地なき

大洲市 堀内曉風

軍手編むその手話を聞いている
恩に着るとは三度目の金のこと
賽銭を投げる心の慾無慾

松原市 谷垣史好

旧姓を添えて賀状のよそよそし
耳たぶのほてり一途な恋ごころ
校正のできぬ人生だから愉し

鳥取市 山本珂也女

応対を安心して見る娘の育ち
数々の愛を残して夫は逝き
久々に語り明した娘の帰省

島根県 堀江正朗

傷夷軍人会で(二句)

見えぬ目へ隻手の戦友箸をくれ
酔うて軍歌うたえば傷が疼きだし
たまるたまるとたまる話は雪のこと

島根県 堀 江 芳 子

髭なでて髭なでて誰か来んかいな
信じきるあなたに済まぬ夢を見て

安心をさせてカルテは二枚舌

大阪府 古 川 静 波

はったりの叔父一升空けて去に
花だより妻和ダンスをまた調べ

火葬場のかえりげんげを摘む姉妹

大阪府 黒 田 真 砂

満ち足りた心茜の雲に付つ
生きる張り昔も明るくねぎさむ

姿見へそつと倅せかみしめる

八尾市 高 杉 鬼 遊

叩かれてテレビ素直に写るなり
消えるから雪は刹那を淨く舞い

雑布になつても所詮絞られる

熊本市 黒 田 保

茶を淹れる音へ想いの又迷い
メモされる意見へちよつと身構える

角材の好きな平和に神迷う

竹原市 森 井 菁 居

硯箱とじるに惜しい夜のしじま
アルカリは苦手にナマコ生まれつき

生まれつきながらオコゼは損な貌

倉敷市 松 下 梁 水

愛強し亡母の日記の一頁

大臣を叱る社説がうなずかせ

地位の差へいつか吹き込む隙間風

高知県 左 狼 子

よそさまにうちの子しっかり者と聞く
ポケットに不快な紙幣をねじこまれ

淋しい日一日人を見ていたり

大阪府 田 島 英 夫

ハイと云い直ぐには立てぬ義肢わびし
ハラの立つ時は義足をかろく打つ

控え目に生きるがさがとなる義足

羽曳野市 麻 野 幽 玄

靴の汚れ目立つ失意の続く日々
愛拒む心言葉と裏腹に

振り向かぬ別れ決意を背に見せ

岡山県 目 賀 芳 月

一票で世直しする気幼なかり
春の風ミニもモンベもよく似合い

無理をしてクラシックばかり聞き

鳥取市 有 田 とし 江

踏みしめる雪へ孤独をふと感じ
臥す夫と語る炬燵のふと寒し

病む夫へお風呂の加減も気を使い

京都府 福 村 飛 龍

会う場所は何時ものところで分る仲

人並は有難くない風邪をひき
五時半の男のように帰宅する

東大阪市 杉 本 公 子

美しきとばりの下の泣き笑い
かたくなな心の奥の熱きもの
ダイヤルを回してさてと何話そう

和歌山市 垂 井 葵 水

客送り帰えして気付く手の輪ゴム

売場からバーに抜かれて随ちはじめ

厚化粧男に苦勞した小じわ

新居浜市 村 上 水 軍

二度と来ぬ今日雑草のように生き

まだ見えぬ孫の目先で振る玩具

春の磯耐えて島人尋ね来る

大田市 藤 田 軒 太 楼

泣けるだけ泣けと友情暖かし

ゴーゴーを踊った花嫁とはみえず

表情をくみ取る世故にも慣れて老

高知県 山 川 勝 子

廻りものと云う金我家を素通りし

先生もお暇かパチンコ屋へ入り

まだ明治あり山村杵の音

島根県 山 本 文 子

ヒロインになって徹夜のページ繰る

いやですね落ちてる金にフト動ず

彼の人の姓にわが名を添える夢

鳥取県 川 崎 秋 女

古傷に触れそで切ったメロドラマ

猫の恋お前未だかと猫に聞き

親友も他人と知った日の空虚

下関市 志 賀 木 石

肩書もこんなにて持てば重たかる

学校から連れて帰った蚤もらい

昼飯の近所へ来てる衛生車

竹原市 脇 本 政 己

団地の灯小さな幸でよしとする

負け犬の遠吠にも似た昼の酒

髪染めて小さなあがきをこころみる

竹原市 岩 本 文 晴

石垣のすみれひっそり春を吸う

鬼瓦鼻むずむずと春揺れる

発車ベル今運命の動く音

八尾市 高 杉 千 歩

もやもやを女南でたべあるき

義理人情浪花節ねと見捨てられ

ゆきずりに幼な馴染みの老をみる

和歌山市 植 松 美 代 子

邪心なく仰げば裸婦の芸術味

初対面メッキのうすい人と知り

卒業へ資生堂さんポーラさん

大阪市 岩 城 太 郎

心電図心が読めるわけなし
かん立てて出した辞表に悔があり
子等はこんな女房に味方する

加賀市 木 村 美 穂

女一人寝る夜の夢の白々し
クラス会女の見栄を隅で聞き
どたん場へ来て友情に裏切られ

出雲市 森 山 健 太 郎

肺ガンの記事へパイプの掃除する
貧富の差だけでも資本主義が好き

守口市 岸 本 豊 平 次

商根もお世辞に弱くおまけする
我は雑草だが赤い花咲かせたし

宇都市 櫛 部 い さ 夢

謙譲の美德を妻に叱られる
悪筆も活字になれば有りがたし

出雲市 王 紫

冥土まで尾を引きそうな借りが出来
ハチマキを締めれば異口同音となり

七尾市 松 高 秀 峰

カラテレビ買った隣を不思議がり
聞き上手話上手が長電話

河内長野市 森 本 黒 天 子

甘い柿になれなれ寒肥にせいを出し

朝寝つづいて枕屏風の絵になじみ

松山市 河 本 南 牛 史

百年の春夏秋冬石仏
二人連れ女の歩中へ添って行く

倉敷市 川 端 柳 子

自由なき檻に自由の旗を振る
又あした あしたへつづく夢の橋

寝屋川市 福 富 隆 子

猿年の五度廻って老の春
老眼鏡又針の目のつまり出し

米子市 林 瑞 枝

里の朝雀の踊り見て倦きず
野を馳ける夢青春にわれを置き

大阪市 西 本 保 夫

酔えば出る軍歌 兵隊には行つとらず
其の昔クンで呼んでた事もあり

北九州市 藤 田 独 楽

楽しみは旅路に合せ朝餉とる
建国記念日旗出すことを躊躇する

守口市 田 中 笑 風

外勤の肌に懐炉の心地よし
ポケットの屑をつまんで春を待つ

大阪市 藤 田 頂 留 子

曲りたい時もあるうに床柱
言い負した方にも残るわびしさよ

鳥取市 藤 本 征 山
街の灯へ心の憂さを捨ててに出る
手をひけば猿も愛情通い出し

鳥取市 藤 本 鎮 也
自動ドアに似て断われぬ性悲し
信じてる心が待ってる街の角

鳥取市 藤 本 和 宏
思い出よまた大山に雪が来た
駅弁がおいしそうなり母娘づれ

鳥取市 藤 本 恵 子
お正月だから雪まで美しくしい
雨の中百点だから急いで来

鳥取市 河 口 忠 志
スラム街年玉知らぬまま育ち
猿まわし親方さんが養なわれ

鳥取市 谷 尾 透 風
ポーンズの事には触れず帰省の子
見つかった言い訳してる間の悪さ

鳥取市 藤 本 佳 女
再会を約した愛をうたがわず
老いの身は三猿主義に依る和合

豊岡市 不 二 本 和 久
農捨てて来て街角に靴みがく
ダルマまだ片目の四十路気が急ぎ

尼崎市 平 井 露 芳

虫歯ちくり虫の居所教えられ
雲遠く詩心枯野の涯歩む

松江市 鈴 木 壮 樹
白鳥も汚水の堀にならされる
大禍なくハンコをおして課長補佐

青森市 岩 淵 一 星
サヨナラしてから風の冷めたすぎ
隠居する夢盛ってみるいい日向

豊中市 河 本 雪 男
居眠りを教師も許す定時制
中卒の機嫌を伺う小企業

大阪市 大 谷 カ ヅ 子
初孫のひな人形に手を合わせ
鼻眼鏡つき上げつきあげページ繰る

鳥取市 近 藤 秋 星
母小豆島へ団体旅行
ふるさとの雪にお遍路見送られ

倉敷市 河 村 筒 子
母帰る前夜屋までよく光る
ペン先の悶え失意の日が続く

米子市 河 瀬 茂 人
一年も続くドラマを見のがさず
胃瘻嬖妻に話せば酒の愚痴

笠岡市 高 木 洪 柿

娘にも言い分はありガムを噛む
月冴ゆる野面の麦よ寒かろに

東大阪市

竹中肖二

味けなくテレビ料理を観る無職

立春のビルの谷間に花の店

鳥取県

谷無閑

おみくじを二人でひけば吉と凶

ほろ酔がしんみり語る不仕合せ

倉敷市

小幡里風

吾が恋よ造花の蕾に似て侘びし

とじ蓋という結び目で恙がなし

島根県

志賀美栄

歛こびは不惑の坂を越した恋

大地割り土筆はそつと春にふれ

竹原市

出島静波

ひそひそと鳴って落葉のする対話

心ひそかにと女の糸車

鳥取県

中川定人

倅はまだ老父母が居て四十

結婚と言う日に遠い膝で編み

大阪市

堀口欣一

質札が一枚残る名刺入れ

男でも三人寄れば姦しい

岡山県

片山雅子

ベトナムの戦火炬燵で見て平和

白菜と味噌汁うれしい朝の膳

大阪市

塩浜一路

若人の浪費チョッピリうらやみぬ

求人欄中高年は少なすぎ

河内長野市

小川耕人

みくじ売る巫女も婚期を見失い

みくじでは女運金運俺が春

呉市

嶺田英詩

寒風に立つ仏塔の眼にしろし

内職の部屋に家中よくわらい

竹原市

時広一路

訴えている何か言ってる低い雲

年の功僕の言えないことを言い

大阪市

河原林比呂路

よそ行きの財布女は別にもち

無為徒食妻の働き殺気立ち

岡山市

行吉照路

合図灯磨き無事故の熱意燃ゆ

やわらかい御飯にすると妻はふけ

堺市

斎藤亜也

ある日妻にこんな智恵あることを知り

トーストに倦きて茶漬の日曜日

竹原市

生信笑子

朱色に女はこも泣けるもの

母子してこぼれた夢をひろうなり

鳥取市 小林 由多香
癒える日を痛とも知らず指を折り
松葉蟹みやげに雪の駅を発つ

小松市 四方 天弘美
チリチリと星も寒波に耐える如
雑念を吹雪の中へ捨てに行き

愛媛県 澄 本 満 子
プライドが器用に愛を受け入れず
口ほどに無理のきかない老を知り

竹原市 箕 田 浄 美
日だまりに二人の夢が春を呼ぶ
翼ただひろげてみるだけ籠の鳥

和歌山市 増 田 次 昭
陽だまりに老人二人うづくまる
言訳の土産枕に寝てしまい

熊本市 高 野 宵 草
部屋一杯に拡げた玩具不具ばかり
なさけなや子等とチャネルあらそえり

大阪市 梅 園 摩 耶
懐妊の妹神秘にて雪の道
自嘲する心へ粉雪ふりかかる

諫早市 原 田 明 春
人形を抱いてるようなハネムーン
子の書いた妻は無性に若く見え

今治市 米 子 映 月

何くれとなく世話するも恋
恩人の娘の恋受けぬ恋があり
尼崎市 中 谷 利 美

ふだん着の客はこたつで用が足り
長靴といえば色気のないブーツ
八幡浜市 別 宮 す き

ぼたん雪寒行の尼が点となる
エプロンの真白まばゆい新世帯
芦屋市 丸 川 愁 電 子

追求の手はスキャンダル見逃さず
寝不足をゆさぶるようにベルがなり
大阪市 大 谷 重 夫

溶接の火花が稼ぐ造船所
初春の夢はマイカーマイホーム
大阪市 半 田 夏 生

女まだ酔うてはいない京なまり
普通寺市 伊 藤 歌 子
雪どけのあぜに露のとう春をつけ

寒空に取り残された朝の月
八尾市 古 川 鶴 声

デモの種つきからつきと出る世相
仙台市 川 村 映 輝
春遠きことは暮しのことであり

草津市 久 保 和 友

尼崎市 中 溪 慶 彦
妻と娘の内緒話しは金が要り

堺市 羽 田 一 扇

なんやもう消えたか野次馬残される

河内長野市 井 上 喜 醉

目に見えぬ心と心そつと触れ

鳥取市 細 谷 長 平

チャンス待つ粘りに秘めた底力

宿毛市 瀬 田 美 知

突然逝つた柳友へ

停年のくるまで弥陀に妻あすけ

大阪市 福 田 秋 風 郎

へそ曲りが国旗出してるように見え

高槻市 山 田 スミ子
初笑い今年の福を信じきり

大阪市 宮 本 地 楽

新調は月賦と云わずにデートする

下関市 和 泉 松 風

方言をたくみに入れて宮田アナ

京都府 菊 沢 破 天

なるようになって小さな家で住み

大阪市 影 山 啓 吉

うつろな目ふかす煙草のけむを追い

泉佐野市 大 工 チ ヨ

交通事故身近に迫まるおそろしさ

大阪市 橋 本 緑 雨
老人の福祉雑誌まで割引し
賞状がこんなにあると見せる子がない

今治市 長 野 文 庫

気に入らぬ目付きが勤へがつんと来
相手にも筋骨がありだし抜かれ

機械的の拍手へ講師御満足

大洲市 米 沢 曉 明

愛嬌のいい娘名前をすぐきかれ
裾野だけぼんやり見えるあれが富士

小松市 山 上 千 太 郎

手の先はいつでも孫の方に向き
雪道にこけてたれも意にとめず

争いかたわむれか岩に波くだけ

和歌山市 秋 月 宏 方

車ともカーとも凶器とも呼ばれ
極楽へ行ったら逢える人多し

名古屋市 長 谷 川 鮮 山

無理をしなさんな おごってくれた礼
笑わせる話題を提げて披露宴

・ 近 詠 ・

路郎賞・川柳塔賞候補作品から

百人集

(順不同)

路郎賞・川柳塔賞候補作品の各
選考委員と、川柳塔賞九位以下
と退会者の句は割愛しました。

―編集部―

内職に藤色があるたのしさよ

内藤 ささ子

手品師の鳩飛んで行くところがなし

後藤 梅志

疲れてるまふた閉じれば音がする

宮川 珠笑

しあわせは鞍上の人信じきり

戸田 古方

レール二本交ることを許されず

服部 十九平

あたたかい掌だった再婚するときめ

越智 一水

春に咲く花をわが手で咲かせた気

寺田 花宵

ありふれた人が悟りをひらいてた

吉田 圭井堂

飲みたがる男着たがる女 秋

山川 阿茶

裏側を見せた孔雀の勘違い

石倉 旅風

人生の傾斜へころげまいとする

不二田 一三夫

生命保険いっそ死んだるかと思ひ

河原 みのる

国訛り失意の耳にあたたかし

本多柳志

息子にも犬にも家庭教師付け

西森花村

僧正ヶ谷雨も寿永の色なるか

正本水客

蚊帳の隅は故郷よりも晦く遠し

橘高薫風

ひとりの家に帰り電灯みんなつける

早川清生

姿貲人間むごいものを食い

吉原紅月

オルガンは妻のへそくり作る音

奥谷弘朗

継ぎ継ぎの小包の紐も有難く

小西無鬼

社長室友は昔の友ならず

工藤甲吉

よその年寄へやさしいことが云え

杉原愛鳩

まっすぐに歩いていてもよく曲り

浜田久米雄

三面鏡なんでもなかった顔にする

奴田原紅雨

プライドも理性もある日邪魔になり

久米奈良子

悠々と地下街すかたん歩いてた

傍島静馬

熱帯魚意味なく動き陽を知らず

本田恵二郎

なんとでもぬかせとダンプつつ走り

岡田拳法

エプロンを付けると猫も起ち上り

吾郷玲人

嫁きもせず困われもせず三味に生き

若柳潮花

盆踊り月に時計の針がない

今西章雅

結納の紙幣確かめて確かめて

大坂形水

拌みやのようにシエカー振りまくり

安藤桂仙

コンベアに乗る人生のふとわびし

羽原静歩

行動にうつつに白髪邪魔になり

大鶴喜由

雑談になつてから出たい意見

松下たつみ

けちでよし気がよくてよし替わが子

金井文秋

憎みつ従いつ女のどうかしら

岩田美代

キャンプの荷だけは重たくない若さ

小西雄々

看護婦が女に見えるほどに癒え

小林孝正

単身赴任生理出張許される

田垣方大

愛してて妬いておこらすのも矛盾

川岡靈眼子

眼帯をはずして零を読みなおし

関戸宗太郎

コマーシャルうるさがられておぼえられ

安平次弘道

パチンコの釘ほど守る子の野球

和田一乃字

つつましく生きてても女噂され

藤井明朗

我女愚痴の多きをさとりつつ

中島小石

御臨終不幸にも金があり過ぎる

福井野迷路

猫といっしょに大屋根に寝てみたし

小川静観堂

身よりなき老婆いくさのことにふれ

森田布堂

本当を云うのに一晚中迷い

小谷仙山

骨のいろやくざのいろはついとらず

児島与呂志

要領の悪さに徹し文化財

仲どんたく

恋人の影踏まぬよう気を使い

直原七面山

妻はもうつかず離れず趣味に生き

三井酔夢

生涯の最良の日を借り衣裳

田村藤波

九輪の彼方は浄土なり夕焼けす

村田 瓢太

女とは悲しきものよはらみ猫

宮尾 あいき

鏡餅母と離れて母恋し

高津 徹也

そつと手が重なり合うも旅なれや

山内 静水

晩酌へ妻のうちわが動く幸

平田 実男

棒高跳び足をバンザイして越える

桜川 不水

風鐸を撮す角度に春の雲

松川 杜的

友達にしてねと第二の母が来る

林野 甍光

お手伝いの気候へ唇噛んでおく

西出 一栄

ちぐはぐな心煉瓦の肌ざわり

西 いわを

二つ三つ辛抱をして一つ買い

吉田 水車

芸術という名で女脱がされる

浅川 八郎

雲の峰あるけばあるくほどひとり

三宅 不朽

情熱の残りを犬とじゃれて見る

前田 芙巳代

理性に負け執念に燃え筆をとり

小谷 葉子

夢だったよそれでもてくてく歩くんだ

中内 孚彦

海の広さへ人間石を投げたがり

谷垣 史好

顔で見る手で見る春の楽しくて

堀江 正朗

泣けそうな夜は日記を味方にし

堀江 芳子

結局はひとりでなやむ金だった

岡本 昭三

ボーナスはないけど牛が子を産んだ

鈴木村 颯子

金貸しに実印任かす不甲斐なさ

和田 痴亭

鉢植にされて唐辛子面喰い

槇 紫 光
王 紫

天体の仲間外れか星が飛び

山田 スミ子

寝静まってから進学を話し合い

八木 千代

子に見つめられて紅刷く手が止まり

西本 保夫

始末書の字が達筆でまた叱り

高橋 竜天

無表情これが仏の顔かいな

坂東 若芽

人間の弱さにも似て犬が吠え

藤本 佳女

カステラを切って私の分忘れ

川村 映輝

共稼ぎの収入だけをうらやまれ

齋藤 流路

この人も褒めれば笑う顔をもち

嶠本 満子

がむしゃらに手を引いてくれる人が欲し

朝の陽へポプラへらへら笑いこけ

小砂 白汀
木山 要次

気が知れて二階を呼んで食べ

脇本 政己

長い目でみられそのままで終り

後岡 としみ

笑ってはおれないものに針の穴

河本 南牛子

子にもろた年玉孫の数に分け

岩本 雀踊子

生活につかれた指の節がなる

上代 美文

倦怠期猫とお話してござる

江城 功雄

うつむけばずれるメガネへ文字憎む

宮西 弥生

別れねばならない玄関見送らず

三宅 ろ亭

オールミスそれでもひざを出したが

林 瑞枝

よいことはみんな私のしたことに

自選百句

よもぎ摘むすがた日本の春はよし
午前中は嘔われておく氣象庁
旧曆で云うて厚着をまだぬがず
一本の釘の無精がまだたり
平凡なしあわせお好み焼の湯気
左官屋の国をきくころ濟む普請
背を流しつつ再婚をすすめて見
だまされてみよう人生長いも
ソйда水見つめおだてに乗らぬ人
すすき積んで帰る花屋へ月が出る
一分のスキもないスタイルで嫌われる
繁昌に馴れて笑顔を忘れかけ
ナイロンの感触に似て情が無し
靴下の穴も忘れて春の客
悪者は枯れたまんまの菊人形
植木屋の横へ虫屋の来た夜店
口下手の友に失恋いたわられ
白髪まだ孫も子供もありません
コンパクトばちんと女気がかわり
極楽でまだ衝突の夢を見る
旱天が続き河童の気が荒し
神域はむらさき色に慈雨つづく
遮断機はおそく秋の陽は早し
福引のビリへやっぱり腹が立ち
虹が出て花火大会中止せず

大花火港まつりはゆれに揺れ
出世してなさげ知らずの名が残り
倒産の織屋の糸が冷えている
母の目にこよみ通りの霜が下り
見舞客毒な話もしてかえり
バタ屋につれそう犬は忠犬らしく見え
三度目のデイト和服で来てくれる
ルンペンのゴロ寝の背の人通り
ハイキング水争いの村を過ぎ
エプロンにつつんでくれた茄子の出来
踏切を渡る竹屋へみなつづき
本堂は小さく梅の名所なり
土曜日の午後は刺激の要る若さ
声かけて昼寝の乳房見てしまい
単車族みんな夫に似た姿
紙雛でさえもめおとのぬくい影
女四十その条件へたじろがず
絹不埒あかぎれの手をよせつけず
十徳ナイフたまに二徳をつかうだけ
宗教も説き三度目の妻も持ち
清貧に馴れていつしか地味好み
暴力をたかが女の顔へ振り
二つゆく一つは秋をのせた雲
食欲の秋は兎も同じこと
すたれゆく民芸村の隅に生き



内藤きさ子作品

青い鳥夫の寝顔へ来ておくれ
バターもう今日の温さに耐えきれず

象のないサーカスが来た秋の雨

開けにくい戸も直さずに母娘住む

針の山弱い男と手をつなぎ

子は無けれどもおもちゃ屋をのぞく癖

一羽だけドライがいてる小鳥籠

大入りを口で受取る結髪部

雑草の一つ一つにある西陽

おばあちゃんの影 孫の影 桃の影

忠孝の匂いが残る菊の花

兵隊の夢をまだ見る疲れよう

国憶う青年の群 旗を立て

ひよいとこのぞけば仔犬もひよいとこのぞくなり

借金を風の通らぬ部屋で待ち

こんこんと諭せど恋に嘔みつかれ

サボテンの沈黙初夏の陽をはじく

ねんねこのパパヘユーモアついてゆき

表札のよごれを毎日見てくらし

人生の運二度三度にげた酒

いつ来てもゴロ寝の足が見える家

おん滝へはたちの肌の惜しみなく

萩の花の雨がしだいに強くなり

陽は西に小銭と帰る猿まわし
血統の良さが次男の方に出る

神父ある日神父ある日の出来心

雀にも背の低いのと高いのと

眉太し火を噴く山を見て育ち

花ふぶき濠の青さへ落ちてゆき

浮浪者に関係のない鐘が鳴り

末席に並び野次屋を相つとめ

右腕が無し右袖をぬける風

初荷ゆく進軍ラッパきこえそう

名刺へオレンジ色の陽が沈む

追伸へそっと匂わす恋心

素うどんの汁がこぼれた予想表

古稀いまだタタキ大工でたべている

八ツ当り髪の不出来と皆知らず

迎春へここはレンコン掘る寒さ

徒食して悪い予感はいよく当り

何もない庭に雑草美しい

儲けてる昼寝長靴はいたまま

その笑顔敵にまわせばこわい人

焚火のすきなおばさんが死に寒い冬

寒い日よ戸棚あけても風が来る

右手使う仕事右手の冷える朝

くされ縁ですと浴衣もお揃いで

枯れてなおあざみのトゲは人を刺す

いつわりの陽ざしにあらず猫柳
内職に藤色があるたのしさよ

句百選

鬢つけの匂いでくぐる注連飾り

かき船の障子も開かず冬の底

肩はずに落し女の呼吸する

待つ人があるから爛冷もろて去に

打ち出しへもう川風の泌みる街

想い出のなかにクリム色の恋

横櫛の粋を舞台にまだ残し

旅の宿廊下の中を蟹が這い

猫を抱く膝の温みももう師走

見合から戻り手袋たたきつけ

九死に得た一生ながらもてあまし

張りつめた女のように三が切れ

肩先へ囁みつきそうなザクロの実

風鈴を団扇の先で鳴らして見

河豚ちりへ雪が散り込む窓をあけ

浮名とは私を暗いものにする

眼のふちに舞台の紅が残る朝

助六へ宵の廓の通り雨

嘘ついて逢う淋しさを男持ち

ひと様の女と歩く星あかり

つれ舞の扇をはじく舞台の灯

削られてゆく山肌に残る萩

呼び出して逢うて泣かせただけのひと

傾城の胸に重味のかかる帯

人情のかけらを拾うて起ちあがり

うたた寝の顔へひろげた舞い扇

追善の名でささやかな寄附をする

君と行くプランのなかの伊豆熱海

掌でまるめて捨てる三の糸

落ちぶれて骨を埋めにまい戻り

月に居て月を忘れていたふたり

逆信も信じ葉餌へ夢もなく

近松の筆は死なねば添えぬ恋

張り替えた障子へ柿の実があかい

帰す気になって玄関の灯をともし

手を曳けば影もあまえている月夜

切れてから三味抱くだけの膝になり

人形の淋しさまたたきひとつせず

囲われたマツチだ風よさからうな

くせのあるブザーが鳴らぬ日を数え

気遣いの真似してみたい日がつづく

丸帯の音もテープは捕えてゐる

思い出が美しいからひとり住む

さしかけた傘花道を行くように

寝ころんだ日もある土堤の曼珠沙華

追い詰めて袂でぶっただけのひと

踏切の赤ヘダンジリ押し戻し

ほつれが欲しいカズラの髪艶

吹き込んだ花掃除機に吸い込まれ

神経をつこて半間の足拍子



若柳潮花作品

人形師のように顔師は書きはじめ
芸道のはげしさ言わず羨まれ
静脈がこんなに浮いて見える朝
カマキリの足を拾ろうて来たヒヨコ
ことはじめ名取りに早い春が来る
小鉢物師匠と弟子の仲で飲み
まだ肌湯の香の残る膳につき
納得のゆくまですねてから帰り
女子寮の朝はピースの箱も掃き
意地張った肩へ蛇の目を着せられる
バーの雨泣かせてくれるひとも来ず
琴の音は聞えず嵯峨は紅葉して
しつけ糸切つて男を逢いに出し
よし不義であろうと舞台だけの恋
顔ぐっと出して取らせるつけまつ毛
玄関のブザーつづみの音がやみ
叱られる覚悟の椅子は浅うかけ
表札をかけてひと先ず落ちつく
肌寒し阿呆もお医者も風邪をひき
断髪み惚れた男の爪も切り
金の世と悟れば愛もみずくさく
奥さんに知れたらうちが死んだだけ
女形背広の形をくずさない
心なお君にかたむく嘘をつき
ユリ活けに来て淋みしさを置いて去に

手に触れる感触だけの日がこわく
ロソクの灯もよし物を思ふ身に
想像にまかせ噂へさからわす
泣かされて来たとは言わぬ化粧する
白髪さえ染めない母になっていた
送られる傘はナンバの灯で別れ
蟹の泡子といる砂の温かさ
そむかれた怨みの日より母を恋い
南天へ細き雨降る仏の日
落葉踏みふみ他人の恋を見て歩き
生きてゆく力で踏んだ足拍子
送る気になつて肩掛とりに立ち
逃げてゆく若さへすがる髪を染め
お隣りもテレスで鳴かすキリギリス
カップルで抜けるに惜しい新地の灯
御ひいきへ自分を守る智恵がつき
大阪は夢の捨て場もないところ
鏡かけ淋みしや秋の陽にやけて
年あらた心の旅がまたつづく
楽屋風呂男にかえる湯をあびる
弟子に留守まかせ師匠の市場籠
慾のない顔で乞食の子が笑い
妻らしく塗つて五勺の酒をつぎ
ひと思うことに馴れたる窓にたち
唇がとけわせぬかと思ふ恋

初歩教室

題 仲直り

菊沢小松園

課題吟の場合は何時も題の持つ意味を凝視し咀嚼しよく理解して掛らねばならぬことは言うまでもないことである。この月の仲直りにしてもその前程に何等かの形の採め事がある筈である。その採め事にしても色々ある、誤解からの場合もあろうし、意志の疎通を欠く時もある、また為めにする故意の場合も無いとは言えぬ、千差万別の中からよい句材を求めて掛らねばならない、題吟必ずしも易しとは云えぬ所以。

お茶くれがきつかけ仲が直りかけ 比呂路
洋菓子と紅茶と妻と仲直り 静観堂
仲直り娘と御寿司食いに 秋女
喧嘩した児がもうお手々つないでる 同
仲人にまだ愚痴の出る仲直り 巫也

④夫婦の採めである、しかもやや長期に涉っている、御互にきつかけを擲んで仲よくしたいのがお茶くれと云われたのが嬉しいのである。ほっとした気持が笑顔に連がる、直り

かけが生々しく情景を表現している。③若い夫婦の他愛のない採め事をちよっとしたアイデアで和解する軽い家庭スナップである。③母娘の採めは着物か縁談か。すしでけりが附く程度なら平穩内容も句意も浅い。④幼稚園風景か、説明の入らぬ軽い句。⑤仲人を頼っている間はまだ生活経験の浅い年令層か、年令の断層から来る愚痴とも云える。

そっぽ向く親もかまわず仲直り 花子
仲直りしてほしかった墓で逢い 葵水
仲直りする気の焼香とは知らず 初甫
仲直りするすべもなき骨となり 正直
仲直りしてからその後たよりなし 正道
①親同士のごたごたした感情に係らず子供同士は純真、委細かまわず子供の世界をよく擲んでいる。②根強い憎しみを墓まで持って行ったそれを近親としての述懐、句材の特異さで印象付けられる。③愛も憎しみも生きて居てこそ焼香する心はずすに軍門に下って雙手を下けている、この句の下五は尚且深酷なものにしている。④音信不通の十数年一切を水に流すべく郷土を踏めば、当の相手はずでに一片の骨となつてゐる、満たされぬ空虚を抱いて悄然と去つてゆく一片の悲劇の幕切れか。⑤仲直りはしたけれど、その後はほとんど音沙汰なし、そこに人間の割切れぬもやもやが残るのだろうか。

仲直りやっぱり金がものを言い 秋月
①よくある場面、句にしたと云うだけで、もつと具象化しなければならぬ、焦点がぼける。②他に同巧の句も多いがこれは、知らぬ顔が面白い人世の多岐単純でないの面白。③大人と違って子供の世界にじめじめし

川柳塔柳箋

一冊六五円
送料三五円

たもの無い、仲直りしたら忽ち宿題を見せられる破目になったのである。下五で生きた。纏め方が参考になる。④予想外のことである、しかもよい方へ違つて明るく驚いたのである。⑤万事が光る世の中、やっぱりが効果的に一句を蘇生させた。

皿一枚割って無言の仲直り 鉄舟
仲直り上手な夫婦で共白髪 すき
仲直りしてから行き来しなくなり 利美
仲直りするのに男酒が入り 同
仲人もほととした顔仲直り 耕人
①皿一枚を動機として無言の仲直りそれもお互にきつかけを待っていたからに他ならぬ、これも夫婦間であらう。②仲直り上手とはお互に深酷にならぬ間に許し合う心持、底に愛情の流れがあり、揺ぎのない理解があつたのである。③仲直りが心に染まなかつたのである、行き来しなくなつたとは確かに世相の一端を突いて居る、佳句。④これは誰も思附くところで底が浅い。⑤これも平凡に過ぎた、もう少し練ること。

仲直りせぬ腹視線さけている 一 扇

つかみ合いらしたのがいつち友となり 同
今日晴れて誤解とわがり手を握り 瑞 枝

仲直り顔をそむけて手を握り 万 竿

①仲直りに応ぜぬ気持ち態度から推測したのである、視線を避けるとはよい表現を得た。②衝突も時には善意と善意の場合もある、この場合悟れば無二の友ともなり得る卒直な佳句。③誤解とわかり手を握りだけでは平凡過ぎる、魅力に乏しい。④中七の面白さに引かれる、ふくれ面も忘れて派手な返事をしてハッとすると人の好きも窺われて佳句になった。仲直りの気まずさを中七に現わして嬉しさの表現にも行届いている。

仲直り心と別な顔を見せ 美 栄

仲直り握手がいたいほど返えり 正 朗

仲直りあなたの顔を立てただけ 同

仲直り夫にいそいそついて去に 芳 子

潮時は立っと思いをジッと押えてさり気ない

顔で出て来た、心と別な顔の現し方が生きている。⑤握手が痛いとは言いで妙、表現も此処まで来れば心から喜んで居る様子も窺えて余すところがない、佳句。⑥これは不承無承ながら仲直りの顔を立てたという、社会生活の一コマを纏め上げたのであるが前句より浅い。④中七の運びで喜んで帰って行く妻と姿も躍如と現わされて居て佳句になった。⑤何事も汐時はある、殊に仲直りにもタイムインが必要である、句材のアイデアが面白い。

仲直り出来ずに遠い人になり 悦 子
仲直りしたい気持ちを目でさぐり 同
幼稚園泣かした日が誘いに來 紫
仲直りした日の雲が美しい 同

仲直り出来たか今日は二人連れ 綾 女

①仲直りを期待して居たのにその儘、その人は目の届かぬ遠い処へ行って終った、誤解したまま永久に、遺る瀬なさがよく出てい

る。②これも同巧、仲直りする機会を絶えず探し求めている、女社会の繊細さがよく出

ている。③あどけなげなところにあるほほえましい情景、純真な美しさが大人達を感動させ

る。④多年のちやもやを解決した心の安らぎが四辺のもの皆美しく感じさせたのだろう。

⑤若い夫婦の採め事を知っている人には今仲よく連立つ二人を見ておかしさを覚えるが一

面ほっとした安堵もあることだろう。

仲直りしてからほんとなりに好きになり 肖二

仲直りする気がお菓子二つ持ち 英 詩

聞いても気持よかった仲直り 保 夫

だれか一人わる者にして仲直り 同

①曲折の後本当のものが現われる、仲直りしてから以前にも増してほんとなりに好きになった、すらすらとし句境に好感が持てる。②仲直りしてから御互いの頑固さを笑い合ったのである、似たもの夫婦と云ったものを思わされる。③これは幼児の世界、無邪気さはお菓子で、これ、うんで万事オーケーで何の奸策もない。④ぐるりを感動させて気持ちのよい仲直り、上五の出だしがよく明るい句。⑤この

仲直りには犠牲が出たそれも世上の習いという処か、やがて雲はれて月は真如の光を増すことであろう。

追っつけぬことがわかって仲直り 白 汀
仲直り惚れてる方が折れて出る 同

①自分の力の限界を知っての仲直り、敗者の暗さがある。②前句ほどでなくとも、底は暗い流れがある。③この句は句品にやや欠ける、もっと掘り下げて創るべきである。

仲直り化粧にひまを入れ 小松園
五月二十日締切 七月号発表

宛先
大阪市阿倍野区王子町四丁目2番地22号
菊 沢 小 松 園

★ 高級洋菓子 ★
★ **プロス** ★

★ 堺市役所前 TEL(2)2334 ★

花 見

河原み の る 選

キャバレーも負けと造花飾り立て
花見時だけが賑わう城の跡
一年も待った花見で雨に逢い
春霞どころか花見へ排気ガス
垣根越し他家の桜であきらめる
せっかくの花見へ低気圧が妬き 藤原秋月
今日だけは此処が天下だ花の莫座 松風
梅はすみ桜はおくれつつじ待つ 野迷路
待ち兼ねて瓢箪磨く春うらら 肖二
明日の苦は云うまい家族花見する 征山
さくらさくら部長課長の順に酔い 大江秋月
菓立つ子が今満開の並木道 旭峯
山桜子が見ようが見よまいが 伊三郎
通り抜け帰りにビール欲しゅうぞ 弘生
菜の花へ少女誰からともなく歌い 宗太郎
老夫婦庭の吉野で足る花見 代仕男
十字架がエキゾチックにして花見 無聖
鉄帽子被せて花見の児を送り 道雄
くず籠が忘れられて花見宴 小西恵子
留守番は庭の桜へむしろ敷く 晁明
就職の娘に降りかかる花吹雪 千代
花便り壁一ぱいに駅は呼び 正朗
下心たぶんありそな花見酒 トク子

花見する隅に茶店の老夫婦
花見酒醒めたらトラの檻だった
夜桜へ理想の花も見付けて来
病む窓へ誰の見舞いか花吹雪
お遍路も弁当ひらく花の下
ストープを囲み花見のプラン練る
花日和鍵二つ三つあずけられ
警察の花見は花の散ってから

佳

花見から帰れば月賦待っていた
花見酒着かない先に大分あき
花の中にいて密蜂花を見ず
結局は咲かないとここで宴を
酒やめた今年の花よく眺め
夜桜へ黙ってあるく夫婦愛
お花見の下戸下戸をにさげて来る
三分咲ほどの花見で風邪をひき
ポトマックかっぱ知多サクラ咲く

軸

筆

久米奈良子選

筆まめな人の無沙汰が案じられ 要次

必勝の自信あふれる筆の跡
米粒へ能ある筆は一首書き
達筆の手紙へ返事書きづらく
微びた筆履歴書かいた時のま
この節の筆墨汁にあしらわれ
筆囁んで拜啓と書く明治者
釣書の筆今度こそ願ひ込め
引合へ朱肉で押した筆の尻
悪筆でよし筆まめを褒められる
亡き母を思ふ唯一の筆の跡
遺言の筆が不服な形見分け
筆の字が二三枚ある年賀状
墨色判断筆で一の字書かされる
年賀状書く筆を買う十二月
失職の我に筆持つアルバイト
虫干しの昭和に読めぬ筆の跡
筆蹟は祖父証文でもめつづけ
ぎこちない筆でも母の愛とどく
筆跡に動かぬ証拠とられたり
手すびがくらしをたてる筆と
筆自慢来たので待つてたよう書
定退の筆が買われて勤め出し
万葉仮名かけて手紙は筆にする
たまさかの筆は子供の筆を借り
筆で書く父ちゃんんだか偉く見
千年の筆も揃えて正倉院
割箸を筆にしたとは見えぬ文字
バケツから前衛書道の筆溢れ
残る香の水茎はめて三回忌
一本の筆で宇宙を塗りこめる
新しい筆で首尾よいダルマの目

鶴丸
古心
庸佑
遊一郎
野迷路
どなたく
宵明
暁明
トク子
雅子
魚山
章雅
綾女
肖二
梁水
里風
柳子
美栄
弘生
隆朗
正生
光道
映月
恵子
透風
佳女
英詩
湖平
軒太楼

神前の契りに筆を持たされる
ひろいつつ読む連筆のあとやさき
左手に筆筆跡をごまかす気
同 頂留子
七面山

佳

鑑定書に鑑定の要る偽筆
筆で書く用は家内にまかしとき
住職の筆で冥土の名が生まれ
連筆に通釈が要るややこしさ
たまたに持つ筆は勝手な方へゆき
おもとの葉筆で洗っている余生
筆のたつ職人さんで見直され
大胆に筆をおろした墨の色
筆ぐせが右上りになる頑固
筆なんば替えてまづい文字は文字
同 旭 正 柳 梁 木 藤
同 同 同 同 同 同

人

「寿」と書き快心の筆を置き
可 住

地

京師 走勤亭流の筆の跡
どんだく

天

達筆のかすれるところに来てかすれ
恵二期

軸

愛の姿勢くすさず今日も筆を執り

コーラス

浜畑胡蝶選

コーラスに合わせ誰かの高い声
小豆島コーラスで行く菜穂畑
古心 要次

ダークにもマヒナもない声を出し
指揮棒はどうも良しと云うコーラス
コーラスに音痴の声だけ大きすぎ
コーラス部団地のママが若返り
ピアノ弾き弾きコーラスの指揮を
コーラスが聞こえ職場昼となり
山彦がひびきコーラスはねかえし
コーラスの友一人嫁き二人嫁き
コーラスでみどりに濡る家族連れ
コーラスに追憶若き日の恋も
坊さんの読経コーラスめいじの巻も
コーラスの弱いムードに引つか
コーラスの仲間になって若返り
コーラスの窓を真赤をチューリップ
コーラスの中の一人に合う視線
コーラスに母も加わる垣根越し
コーラスへ地声も混ぜて山の家
サイクリングのコーラス春の風に乗
コーラスが夏山山にこだまする
コーラスへ若い心をゆすぶられ
コーラスがうっとりハモニー
行楽のバスコーラスを乗せて揺れ
コーラスのはずむ公園柳の芽
コーラスが山へこだまの分校地
吊り橋を渡りコーラスまた続き
何百の口あけさせて振るタクト
コーラスへスカートひだ揺る
コーラス部学校中が鳴りひびき
コーラスが自然にそらた空の青
佳
コーラスが風流れるビルも昼
一進

公輔 庸佑 野迷路 章雅 肖二 初甫 長平 宵明 梁水 光道 七面山 秀峰 芳子 旭峰 隆子 美栄 伊三郎 映山 鎮也 佳女 千代 耕人 代仕男 秋菜 葵水 芳仙 可住

みなさんの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック
積水化学
本社 大阪市北区宗室町1
コーラスにママは昔の声を出し
コーラスは可愛い口をみを開け
コーラスへ今日或人の声はずむ
軸
天
地
人
弘生 里風 要次 中水和 葵水
松風 惠二期

第二百一回(復活第六回)

大萬川柳

「素通り」

入選発表

選者 清水白柳
 投句総数 七百十二句
 入選 八十九句

山口弘道 素通りをされる落ちて落ち目をかみし。
 岸和田 きさ子 改築をして素通りの客が増え
 笠岡遠二 素通りの未遂ニコニコ頭かく
 羽曳野 青峯 A2型やはり素通りしてくれず
 今治 青女 觀光地素通りセールスよう稼ぎ
 島根 明朗 妻の里素通りをして叱られる
 大阪 柳志 素通りをするたび敷居高うなり
 大阪 重夫 素通りのバスの後ろは空いている
 笠岡 真奇 手土産の小さい方は帰りにし
 大阪 慶之助 ハネムーン空から故郷を素通りし
 倉敷 三林坊 素通りを咎めて高いものにつき
 倉敷 梁水 素通りをする気へ道が狭く見え
 大阪 あいき 呼び止めて欲しい素通りしてみよ
 大阪 形水 高速のおかげ素通りの客ばかり
 宝塚 ゆきを 二三日買わねば豆腐屋素通りし
 竹原 菁居 そつとしてくれる素通りかも知れ
 藤井寺 百水 素通りの門口ばったり顔が合い
 米子 瑞枝 言いたそうな顔を素通りマイク
 倉敷 千翁 素通りの気がわかる貸しがあり
 島根 正朗 素通りをしたいが背の児がきかず
 鳥根 芳子 郵便屋は素通り恋はつら
 小松 宗太郎 金の方は素通り責任だけ残り
 出雲 独仙 追いかけて来て素通なじられる

河内長野 耕人 世話やきも一言居士は素通りし
 大阪 誓二 為替待つ郵便素通りしてしま
 岡山 十九平 素通りは出来ず手ぶらでも寄れず
 大阪 静波 兄嫁が来てから素通りする実家
 大阪 静馬 あきらめて素通しだしたご用聞き
 羽曳野 一治 二三日は素通りをする二日酔
 平田 代仕男 素通りはつけが効かなくなつて
 倉敷 恵二郎 素通りをする気でつかと叩かれる
 大阪 比呂路 粗品貰いあと素通りの百貨店
 大阪 野迷路 素通りが知れて電話のあてこすり
 大阪 文秋 あと追われそうで素通り走り出し
 広島 露声 素通りで戻れば一本燗けてあり
 堺 青香 素通りをさせぬ縁起の塩を盛り
 下関 木石 飲み代をためた横顔見せて過ぎ
 羽曳野 桂馬 薬みな素通りするの かまだ癒えず
 大阪 泉吉郎

素通りのうえにタクシー泥をかけ
 妻と出て今日は素通りした屋台
 倉敷 素身郎 素通りしてよかつた後妻が居た
 笠岡 要次 催促と思われそうで通りすぎ
 東大阪 若芽 好い客は素通りひやかしばかり
 富田林 花梢 ホルモン匂い素通りする胃病
 米子 千代 地藏さんも素通り出来ぬ子の入試
 尼ヶ崎 利美 心境の変化素通りして帰り
 大阪 庸佑 素通りをしたたばこ屋へまた戻り
 鳥取 透風 うっかりとした素通りを邪推され

本社 柳川傘番
 創立60年記念
 全国縦断川柳作家大会
 43年5月5日午後一時
 全国8ブロックで同時開催
 一統一宿題一
 「トツプ」「いのち」

鳥取鎮也
鳥取磯山
思い出が素通り出来ぬ駅に降り

大阪美房
今に見る素通りしておく故郷の駅

大阪柳宏子
耳だけが聞いている春の日の講義
銀行を素通りにした詐欺に遭い

東大阪清人
素通りをされたを妻はくやしがり
素通りをせぬ律義さをうらさがり

大阪水客
風よけていたら素通りされたバス

大阪旅風
素通りをわびて旅からハガキ来る
豆腐屋も寄ってくれないほどに

東大阪生良
素通りに女ごころの小さい意地
素通をしたなどすぐに来たハガキ

大阪点心坊
素通りが三日つづかぬ縄のれん
貸しめせず素通りすれば味言

大阪弘生
素通りが鬼門の家へ呼び込まれ
ふだん着のために素通りして帰り

笠岡忠三
呼ばれたら立寄るつもりで素通
素通りをさせてくれぬ雨が降り

素通りをして振り返る縄のれん
順番のはずがどんぶり素通りし

大阪小松園
辻曲りしなに素通り振り返えり
一目でもと祈るころで素通りし

倉敷旭峯
素通りへ二階の窓から声をかけ
声ぐらいかけよと素通り呼び止

岡山久米雄
弥次馬の根性素通りが出来ず
素通りがつまづいてから思い出し

素通りの足小走りになつてくる
素通りのわけは後から話すとし
素通りをそんなにせわしいかと

大阪阿茶
素通りを見て見ぬふりの眼がけ
二次会へ我家素通りするタクシ

佳句
素通りはなじみの犬に尾を振られ
一べんはホテル素通りした二人

守口笑風
毒入りをまたいで鼠素通りし
素通りをしてた神社で式を挙げ

倉敷恵二朗
素通りをする時他人の貌作る
親友の素通り願う程に墮ち

竹原菁居
素通りのもり妻にも云い含め
素通りのおもひに云い含め

岡山久米雄
素通りのおもひに妻にも云い含め
素通りのおもひに妻にも云い含め

出雲独仙
素通りの言い訳け二三歩後戻り

地ノ句
大阪鉄舟
素通りをする気の傘を見破られ

天ノ句
大阪文秋
貸している方が素通りする弱気

選者吟
素通りは出来ぬ墓だけある故郷
大萬ベストテン(三月現在)

(同点の場合は投句先着順)
一 素身郎 一四、〇倉敷
二 柳秋 一〇、〇大阪

三 水客 八、五大阪
四 清人 八、五大阪
五 好郎 八、五高石

六 七十九平 八、〇岡山
七 八きさ子 八、〇岸和田
八 阿茶 七、五大阪

九 弓彦 七、五大阪
十 彦 七、五大阪
十一 彦 七、五大阪

十二 ゆきを 七、〇宝塚
十三 吸江 七、〇藤井寺
十四 光道 七、〇仙台

十五 秋女 六、五米取
十六 千代 六、〇米子
十七 鉄舟 六、〇大阪

十八 要次 六、〇笠岡
十九 代仕男 六、〇平田
二十 千翁 六、〇倉敷

二一 瑞枝 六、〇米子
二二 形水 六、〇大阪
二三 多久志 六、〇西宮

第八回 「荷札」 五以句内
第九回 「貞操」 五句以内
締切 四月二十日

投句先
締切 五月二十日
大阪府高石市高師浜三丁目五十六

川村好郎

川柳たましま 十周年記念大会 4月28日午前10時

マチカワペン



優雅な書き味

☆ 柳 界 展 望 ☆



左から堀江正朝・芳子、清水白柳、八木千代、林瑞枝諸氏（李明氏写真）

（橘高薫風担当）

▼中島生々庵主幹は川柳紋士の二月号に、「川柳発展向上のために」の一文を執筆、いかにして川柳の普及を高めるか、について言及され、むの・たけし氏の言葉でしめくくりされた。「トビラをあけるカギは何か、どこにあるか。それは教えることも教えられないことも出来ない。カギはトビラをあけた者が自分で探すか、つくるしかない。熱がなければ卵はヒヨコにかなえない。カラの中にねむ

り続けるものは、しよせん食われてしまうだけだ。食われたくなかったら自分でカラを破ることだ。」
▼直原玉青氏（本誌表紙執筆）は第八回日本南画院展出品の「相忘」が二月二十九日に文部大臣賞と発表。東京、京都から大阪市立美術館で四月十一日・十六日まで南画院展開催。
▼番傘川柳本社創立六十年記念全国縦断川柳作家大会は、昭和四十三年五月五日（日）午後一時から全国八ブロックで同時に開催され

る。統一の兼題は、トップの兼題と会場は、関東大会（東京）は、予備校・ひとまわり・姿勢・職人・さくらんぼ・髪勢、農協ビル。東海大会（名古屋）は、漬物・カッパル・修業、毎日新聞中部本社。北陸大会（福井）は、面影。よるこび・清井、福井県婦人青年会館。近畿大会（京都）は、空・麦・男・古寺、京都商工会議所。山陰大会（松江）は、創立・向い風（松江）は、腕まくり・フアイト・振り向く、島根県農林会館。山陽大会（広島）は、暎・無限・花びら、平和記念館。四国大会（坂出）は、みどり・朝・表情、坂出市記念館。九州大会（福岡）は、友情・余技、朗らか・ビル、丸紅会館。

▼川柳きりや吟社では、周魚賞を制定、年間秀句を推薦、優秀作品三句に表彰状と銀杯を授与、昭和四十四年四月号誌上に発表することになった。
▼東洋樹川柳賞は中川黎明庵氏（伊勢市）が受賞された。同賞は時の川柳社が十周年記念事業の一つとして設定したもので、その年度

の柳界最高功労者に贈られる。
▼酒の句集「昭和柳樽」が昭和四十三年二月十五日広島県賀茂郡西条町賀茂川柳社から発行された。川上三太郎、石原伯峯序、菅生昭畔編、全国の川柳家五百四十一名の千三百句の酒の句が収められている。
▼光武弦太郎氏（長崎県）は麻生段乃抄をふふうすと二・三月号執筆。句集「福寿草」の作品鑑賞をされた。
▼青森県川柳社（黒石市）では二十周年記念事業として、「ねぶた」誌上に青森県川柳人名鑑を随時収録するので、希望者は、本名、生年月日、職業、略歴明記の上、作品十句と顔写真、参加費五百円同封申し込むこと。
▼春季玉野市民川柳大会は三月二十四日（日）午前十時から玉野市中央公民館で開催。
▼奈良番傘創立二十周年記念大会は前号既報の通りであるが、兼題のうち南部とあるは、南部の誤りに付訂正。「南部」は釜風選。なお平安、ふ誌、せんばの各社からも選者が出る。
▼川柳噴煙吟社主催の噴煙

春の大会は四月二十八日（日）午前十時から熊本市水道町熊本県福祉会館四階ホールで開催。兼題、釈迦・横・電話・茶・退屈・鯨・男、各題三句、投句は縦十八横、横四種の句箋に裏面に雅号を明記の上、四月二十日迄に熊本市出水町国府二〇八八大嶋方川柳噴煙吟社大会係宛、投句料百円。
▼河村日満氏（鳥取市同人）から、「川柳講座早速お送り戴きありがとうございます。二月七日両眼眩下垂というややこしい病名で



多々多薬品

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に



アリペナ

右土腕を手術、次いで左を
といることになりましてが、
片眼がどうやら役立ってと
いうところでお礼状となり
ました。

▼工藤甲吉氏（青森市同人）
から、「東奥日報が今度
月一回の柳壇のほか、『世
相川柳』欄を設け、毎日五
句掲載、いささかなりと川
柳普及に役立つとは思って
います。」世相川柳は、葉
書一枚に何句でもよく枚数
自由、推薦句には呈賞、筆
名は自由だが住所氏名を明
記のこと、選者工藤甲吉氏
宛先は、青森市長島東奥日
報社「明鏡係」。

■榎の程を。

▼森田布堂氏（鳥取県）は
二月十三日令息の宗立高校
入試の付添に防府市へ。帰
途悪天候で列車不通となり
難渋されたが、令息は試験
に合格、愁眉を開かれた。

▼藤原秋月氏（岡山県同人）
宅の裏の山林が焼け、一
時は胆を冷されたが山林の
みで住居は難をまめがれほ
つとされた由、四月にはわ
らびが沢山生えることでし
よう。

▼山田季賛氏（高槻市同人）
は二月四日飛鳥坐神社お
んさ祭を見学、岡寺へ参拜
十八日は滋賀県へ帰郷、二
十三日は相生市の「あいお
い荘」での助役会議に出席
二十五日は、大鉄川柳会の
吟行に参加された。

▼井上旭峯氏（倉敷市同人）
は退院以来順調に経過し
ていますからご安心下さい
と。

▼阿部佐保蘭氏（東京都）
から、「紐育の藤村涼子さ
んが、大森風来子氏の活躍
ぶりを知らせて下さいまし
た。私もアメリカへ行き
た。くなりました。どうです
す。むさん薫風さん等川柳
塔の皆さんで大挙してアメ
リカへ行きませんか」。

▼木村一路氏（加賀市同人）
も退院し自宅の畳のよ
さを痛感、おめでどう。

▼傍島静馬氏（高槻市同人）
は甥御の結婚式に福岡へ
行かれ三月三日付と五日付
の旅行があった。大宰府天
満宮で「梅ガ枝餅のおつり
で買った青い羽根」静馬。
天草五橋で「春一番天草五
橋くぐり抜け」静馬。

▼前山北海氏（ハワイ同人）
が編集局の横顔という特
集に登場。重役ばりの恰幅
の漫画に布味報知さつての
肩書き保持者として紹介さ
れた。

▼大坂形水氏（大阪同人）
は白浜ゴルフ場のT.M.G.
ゴルフ会で優勝された。

▼川岡雪眼子氏（諫早市同人）
は長崎県の地元新聞の時
局川柳の選をされること
になった。

新同人紹介

工藤安亭

—甲吉・涼人推薦—

を全うされ二月二十一日午
前〇時二十分逝去。謹悼。

▼西出一栄さん（大阪市同
人）の母堂も八十六歳のこ
高齢で逝去され三月八日葬
儀。謹悼。

▼清水白柳氏（大阪府同人）
は三月二日堂島清交社で
開かれた番傘六十周年記念
大会の会合に生々庵主幹人
代理で出席、番傘近江砂人
主幹から記念大会に京阪神
五社の協力を求められ、こ
れを了承された。

▼川柳たまたま例会は二月
十一日玉島中央公民館で開
催。川村好郎氏（本社副理
専長出席）

▼二月ひらな句会（青森
県）は十八日工藤安亭居で
開催。

▼大鉄川柳会は二月二十五
日京都北野天満宮・平野神
社へ吟行。

▼坂本三省氏（新潟県）か
らの飛躍振りに敬意を表し
また不二田一三夫さんの
は僅かなスベスベながら大
変感銘を受けました。

▼藤本主税氏（ふあうすと
川柳社同人）は三月四日入
葬、六日急逝という謹悼。

▼橋高薫風は二月十八日勝
浦温泉・那智滝へ遊び、温
泉の雨に心身をほぐした。

▼大山雅城氏（東京都同人）
の母堂が八十六歳の天寿

松坂屋友の会

＜カトレヤクラブ＞

★ 会員募集 ★

お買物資金の積立におたのしみが
プラス、満期までの12カ月間にいろ
いろのたのしい企画をお贈りします
会費 1カ月1口1,000円

10月末までのご入会には

- ★記念品呈上 ★秋季特別大行事ご招待
- 観劇 美空ひばり公演(梅田コマ)など
- 旅行 善光寺・上信スカイラインバスツアー(金費一部ご負担)など
- 映画 スカラ座・スバル座・北野劇場など
- 講習会 各種月例行事

詳細・お申込は
6階友の会へ



大阪天満橋
松坂屋
942-2201

本社三月句会

会場 自安寺
八日 午後六時

席題「ネオン」 本多清人選

パチンコのネオンが目を引く新市街
禁酒してネオンの街へ眼をつむり
ネオンの流れが男をまた狂わせる
昼見ると無理な草書にしたネオン
泥川もネオンの映える美しさ
初めてネオンへ若さすりへらし
取引をうまくまとめているネオン
ネオン街一人で歩くのもドラマ
昼見れば骨だけ見せているネオン
都会餓ゆネオンの色は嘘の色
窓に類寄せるとネオンの海がある
駅前ネオンは派手に夜を誘う
時々ネオン易者の顔へ住む
屋上もネオンでかぜが街に吹く
ネオンから抜ければ夜は長い道
ネオンの灯勉強部屋の向きを変え
ネオン点滅昨日のことに触れさせず
一字ずつ夜を綴っていくネオン
ネオン街浮草やたら繁茂する
観光ブーム古跡にネオンの小料理屋
駅裏のネオンあやしい午前二時
ウス暗い横丁があるネオン街
金持て来いとネオンがまたいた

静馬 与呂二 狂雲 文秋 小松園 武助 三佑 庸介 宣介 紫香 一扇 与志 弓彦 小松園 滋雀 凡九郎 万九郎 花梢 文秋

★ 三寒四温という三月句会。出足すこぶる好調で、はじめての方が数人ご出席といううれしいムード。柳歴三十年と初出席の方が同じ条件で作句するハンデいなしの道場だけに、お気の毒だがガンになっていただきたい。若本多久志氏のアメリカとメキシコみやげ話は、三十分間で米墨旅行というたのしさを満喫。とくに今年ハオリンピックがメキシコでおこなわれるだけに関心が深く、会場は熱心に聞き入る。ポリスがチップをもうすこしは、本品を舶来品として金持ち連中が見せびらかすとか、痛快な話である。キャノン、ソニー、ダットサンは世界一人というほど、高いそうである。

国立園 奥新和歌浦

・ 雑賀崎

国際観光旅館

うおまたろ
魚又楼

TEL 和歌山(44)0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

風光明媚な
海岸美を
誇る

ネオンの灯さけて通った二人連れ
帰郷してネオン無い夜のもの足らず
七彩のネオンに濡れて恋が泣く
非常口ネオンの裏も朝になる
見覚えのネオン車窓に旅終わる
哀楽をネオン素直に熔け込ませ
一字だけつかぬネオンはクイズめき
大阪のネオンが消えてパトロール
盛り場もネオンが消えてパトロール
夜のネオン心と別な灯に唄い
ネオン真ツ赫強いて微笑をもつ怖
ネオンの海へおぼれて消えた娘
赤線にネオンがついていない不思議

席題「勝ち気」

田中狂二選

七光りあつて勝ち気割引かれ
寄付の額勝ち気な割に張って居ず
税務署へ勝ち気な女房泣きにや
女ひとり生きる勝ち気が眠らせず
失恋もどく吹く風と勝ち気な娘
勝ち気もチラリのぞかす姉女房
一言えは十で返す気の強さ
早口に勝ち気言うだけ言うて去に
内輪げんか何時も敷かれて居る夫
長男にあればと思ふ勝ち気な娘
どうしようもなかったと注意に耳かき
三味線に勝ち気を見せるバチの刃え
おん曹子勝ち気も山気もなく無事
模様替勝ち気の嫁が来てはやり
後輩の勝ち気に尻を叩かれる
勝ち気な娘の失恋はがゆがる
道理には勝てず勝ち気が兎ぬぎ
肝心の時に勝ち気が邪魔になり
勝ち気さを喪服に包む未亡人

狂二 三選
あいき 一三夫
水客 一三夫
すゝむ 武助
庸客 水客
双楽 水客
六童子 六童子
小松園 六童子
清人 小松園

三月の月間賞は
ホームラン打者、
羽原静歩氏。
(河井庸佑整理)

★

出席―与呂志・
真山・古方・庸佑
・双楽・静馬・文
秋・平幸・一舟・
一三夫・滋雀・県
吉郎・紫香・葛城
・静歩・水客・武
助・孚彦・美巳代
・花梢・いさむ・
醉升・多久志・村
雲・一路・肖二・
綾女・形水・一扇
江・功雄・狂二・吸
白柳・天笑・金
三・万的・すゝむ
・柳志・柳宏子・
千梢・喜恵・トメ
子・丸郎・舟遊
・宣介・伊升・仙
葉才・三喜造・笑
痴・三司・頂留子
・好郎・まや・綱
子・誓二・清人・
栗・生々庵・季賛
・小松園・雄介・
あいき・葉子



気品あふれる
シルエット……

風格と折り目の正しさで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。その秘密は、東レテロン®— 激しい動きにもシワ、型くずれ知らず。いつでも気品あふれるシルエットです。



東レテロン® (ポリエステル 100%)
オルテロン®
スーツ・スラックス
TORAY 東洋レーヨン株式会社

上役の一部に買われてゐる勝ち氣
總會に勝ち氣通らぬ多数決
風雪に堪えてくじけぬ底力
勝ち氣な娘婚期の過ぎた顔でなし
花活けるころか鬼とまで言われる身
勝ち氣どうもあはれとまで言われる身
婆抜きを気長う探している勝ち氣
徹夜して縫うた晴着にみる勝ち氣
コンバクト勝ち氣の涙ぬりつぶし
勝ち氣同士はらはらさせて手を振り
涙一つ見せぬ勝ち氣も寡婦の意志
勝ち氣な娘日記に秘めていた秘密
再婚を蹴って勝ち氣が踏むミシン
一生を敷かかれとおしてきた勝ち氣

席題「底」

河相すゝむ選

ドン底も知ってる今日の好き嫌い
どん底の暮しの中に正義感
どん底へ墮ちた安堵が雑魚寝する
どん底の暮しにかけける虹の橋
夜の底裸電球に蛾がおそそ
嘘も言えぬ腹の底からお人よし
母の過去と尊く心の底に抱き
上げ底は承知土産の嵩を買い
どん底の暮しを壁に見つめられ
釜の底見せぬ女の小さい見栄
底へまで届いた音ははねかえり
ふるさととは悲しく眠るダム底
底冷えのする夜よなきを待つ長
冬の陽の底入りこんだ鳥の屋根
どん底でまだ統一している孤独
最低の言葉で女身がまえる
底抜ける明るさ不具と思われず
紅をふく三面鏡は夜の底

天笑 多笑 多志 笑代 静歩 仙葉 水客 多志 多客 生々庵 滋雀 弓彦 三夫 小松園 生々庵 葛城 武助 花梢 一笑 痴

腹の底見すかさされた熱帯魚
三角の底辺に居て肩を張り
どれもこれもあげ底型の人間像
どん底に生きるエチケットあり
底抜けるお人よしと意地があり
底辺にさす陽は曲りくねって来
精薄の子に腹の底見すかされ
植木鉢の底でみみずが遊ばし
底ついた財布へ女素っ気なし
底辺に住む気楽さよ明日は明日
どん底の千円札にある重み
議題停頓と詭弁もようやく底をつき

兼題「ブーツ」

樋口舟遊選

格好いいブーツ私に無理させる
ブーツ履く夕陽の影が素晴しい
流行をいうからブーツ欲しくなり
ラインダンスブーツの足のよく揃い
流行のブーツにちよっぴり自己満足
天気にはかわりがないブーツ
占いの灯に悩みあるブーツ
三十をかくしたつもりでいるブーツ
春風とともにブーツの放つとかれ
善人のブーツ童話をとびまわ
警察で身許引受け待つブーツ
ミニで身許時代代を蹴つて娘
昭和元祿草履とブーツ履き別ける
おしやれより雨の用意に履くブーツ
粉な雪がブーツの隙間斜に入り
寒むいばの足をブーツが温める
春の雪が解けてブーツの唄がある
愛光るブーツへ春を奏す風
ブーツ軽ろやか春の土手は若い唄

眺年 正弘 綾子 芳女 孚彦 弓彦 吸江 弓彦 好方 滋方 古方 小松園 章水 好水 金三郎 葛城 葛城 愛子 一三夫

ことさらにブーツの足を組みあわせ
ゴーゴーのリズムブーツもいっせ脱ぎ
ブーツの白き花束を重くする
ふくらはぎ細いブーツがまだゆるい
ミニに合うようにブーツが伸びても
サノナラるときブーツはすべ前と向く
それが異かもブーツに豹の斑点
追い越とブーツコツコツコツコツ
真黒によごすブーツの白がある

兼題「陽当り」

長谷川三司選

日の当るポストに挑む体当り
陽当たりへかかめは葉が話しかけ
陽当たりを洗濯物が順に追い
日当たりを受けて失対は草を刈り
陽当たりをよって失対は草を刈り
人生の峠を越えて日が当り
ハネムーン羞恥へ朝の陽がまぶし
シャボテンと選って庭の陽を逸つて
陽当りのつぼのように通天閣
春の陽へのよさも値段に入れた部屋
陽当たりには白髪が光る安全灯
陽当たり母の白髪がよく目だち
陽当たりじゃ見られぬ顔を塗りたぬ
陽当りの良い窓側へ先に乗り
陽当りの将棋へ駒目がかまじ
陽当りに春を吸いとりがわかし
陽当りに無聊をかこつ瓜を切り
陽当りを如才なく褒め集金人
たの一つ取りえは四季の陽が当り
陽当たりは金魚の鉢の藻がゆれる
陽当たりは金魚の鉢の藻がゆれる
陽当たりは妻の小じわの笑える日
バックミラーに流れる街の陽の当り

野迷路 杜弘 正弘 喜水 百仙 柳志 笑介 笑城 天吉 泉舟 形水 形水 滋雀 小松園 小松園 形水 六電客 水客 生々庵

陽当たりへ一定年前の腰を上げ
陽当たりを惜しむが如く障子閉め
陽当たりをよけて邪道の恋に生き
叱られて陽当たりで字を書いていた
陽当たりへひよこをつれて鶏も来る
陽当たりへ池石亀の顔が浮き
陽当たりにおこれる春のバラが咲き
サンルーム失意の胸へ陽が高し
陽当たりをさけて女の子の生くる道

弓彦
伊丹彦
まや
ま彦
紫香
喜恵
六童子
舟遊
柳城
葛城志
滋雀
仙才
花梢
武助
万助
水客
小松園
三司

兼題「公害」

正本水客選

出稼ぎの夫が気になる公害地
公害は逮捕も出来ず騒ぐだけ
公害は時を得顔の政治留守
鵬外のイメーシ何処へ高瀬川
大阪の子の図画グレイの空を塗り
交通至便公害なしとは書いてない
開発と言う名の公害威張ってない
公害に公孫樹負けるな御堂筋
妻の不機嫌まで公害のせいにする
こんなにも青さの空を知る掃省
里帰りした海岸に水が無い
排気ガス名所の松を用捨せず
文化程度をその公害で計られる
公害を突っ切るようにビルが建ち

正朗
芳子
旅風
杜的
どんたく
百留子
頂水
章雅
生々庵
凡九郎
天九郎
小松園
凡九郎
生々庵

勝訴になって公害はそのまんま
公害も住めば都と気にもせず
自殺者の出るまで公害放つとかれ
スモッグ情報会社は生きている煙を立て
さわがれてから公害怖わくなく
公害費は無いが宴会費は確保
公害の街に健康優良児
公害に目をつむつる市の打算
喘息で死ぬまで煙香放とかれ
公害の苦情へそらばん持って
結論は公害法が出来てから
新市街もう公害にせめられる
公害の煙りを電車で見え通り
陳情は鵜呑み公害実施難
公害へ役所同士のなすり合い
栄転のイスが待つてる四日市
公聴会公害をみとめただけでけり

古彦
弓彦
孚志
柳久志
多江
吸江
天笑
滋雀
白柳
花梢
紫香
柳宏
公輔

★ おことわり兼題「決心」は三才と軸吟だけ
で、あとは次号で発表いたします。―編集部
女もう態度で決心しているなり
反探の決意眼鏡を拭いている
決心を妻の内助にささえられ
決心はしておりますとまだ二号

★ 好郎

寒い空にらんで掲げた鯉のぼり
公害をつつき選挙に出るつもり
公害に鳳凰屋根から降される
公害の空にまだあった白い雲
公害補償とに角鮎が居た川や
公害地を見舞うて被災者が票に見え
工場を招けば公害連れて来る
産業公害ガンのように不洽かも知ず

公輔
紫香
いわを
誓二
日満
六童子
肖二
水客

★ 玉造川柳会―四月十日午後六時
から―題・四月馬鹿・無理・リズム
―大阪信用金庫玉造支店
南大阪川柳会―四月二十日午後六時
から―題・太陽・行末・ドライヤー
咲く―生野区北生野町一丁目五、文
秋居近く乗願寺。

山路関古書下し
「古川柳名句選」

代表的五百句精選680円
東京都神田区小川町二ノ八
筑摩書房

お買物は 明るく楽しい
ハンシンへ!



阪神
大阪梅田
水曜定休 / 電大阪361-1201(代)



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋選

飾るから時代感覚疑われ 弓彦
悔のない今日一日の服を脱ぎ 滋
松飾り取れて出てきた飲み疲れ 静馬
興奮の議論は焦点から外れ 好
叩いたら動く時計も飾るとき 古
すかみたいな顔でおめでたきいて 柳宏子
荷飾りを敗北感で見送り 方郎
酔うても玄関まではたどり着き 文秋
酔って寝るただそれだけの人になり 金
焦点の先は濁した評論家 三栄
一日のスタート定期券忘れ 小松園
一生の思い出飾る借衣装 水園
のろのろの台風一日まごつかせ 形
めでたやなめでたやで金が消え 恒
焦点をわざと外してさぐる肚 一
雨戸の節穴が焦点となる空家 明
冗談飛ばしていても焦点くるってず 凡
総会の拍手に日まごつくサクラ 九
定年へ一日一日身が細く 柳
一日の人出でさい銭見当つけ 静
花嫁は拍手にてはれて伏目がち 双
悩みなくいつもおめでた損ばかり 千
君二 歩
肖吉 柳
風二 郎

末っ子だけがママのおめでた待たさ
一日がこうも短かい忙しさ
熱狂の拍手へ横綱無表情
応援の拍手にわれを取り戻し
こわごわの意見へまさか拍手とは
あびる程飲んで酔えぬ胸のうち
初詣り拍手の音に身をただす
禁煙の誓いも一日またのぼし
拍手止み一瞬静かになる式場
高知川柳社 (高知市) 川竹松風報

高知川柳社

川竹松風報

恋人へ向ける笑顔は別に持ち
満腔の謝意を笑顔で受けとめる
お見舞の客へ力のない笑顔
旅帰りの笑顔の妻に気がほぐれ
幸せは笑顔のそろう夜の膳
ホステスをくどく笑顔もパーの隅
嘘少しませた笑顔につり込まれ
一日中君の笑顔がつきまとい
パーい屋で朝を迎えた初日の出
初日の出拜む明治の老夫婦
農繁期日の出を待たず飯にする
予算にはない二次会の請求書
看房の落書アル中の詩を綴り
十二月去年と同じ手もつかい
幸せをはこぶ風なら寒くとも
よぼよぼになっても嫉妬深い愛
十二月下戸につまらぬ日がこつろ
はつ春の墨する心わがこつろ
雪が降るぞと酒友から電話
大坂通信病院川柳会 森下愛論報

大坂通信病院川柳会

森下愛論報

宿の下駄履いて地獄の湯気を振り
湯浴の楽しみ温泉なればこそ
混の街に一人で泊る苦難なる
温泉に行くだけ金を野暮する
駅員に起されてはいる酔っぱらい
移動するたびに雑用が一つふえ
中島生々庵著
川柳講座 送料〇円
眠りかきさされる
噂ほどなかつた遺産へ皆あきれ
うわさなど気にせぬ妻へ手を合せ
週刊誌噂にしても派手なこと
みくじなど引かなくもたノイローゼ
凶と吉同じ値段で売るみくじ
おみくじはにんまり笑える手を合せ
酔人の舌を知ってる小料理屋
うまかつたけど高かったと歯を理屋
まあまあ味の味が仲居笑顔よし
またテキカとも姑よう云わず
初めラッッシュアワーは巻き込まれ
リレーのように初荷はつきおろし
年玉の様に初荷は置いて行き
陸橋に利害からんで宙に浮き
陸橋のこれから先は百貨店
陸橋で腰のばししてはる老夫婦
事故多発合議合議でつく陸橋
寿の字にしあわせが包まれる
盃に寿の字が浮くめでたい日
秋月

備前川柳社句会

目賀芳月報

初夢を見た初夢を見る二日酔
もう朝になって初夢見そこねる
夏甘
生子

寿の謡へ咳をこらえとり
 肩書を捨てて雨読の日をすごし
 振袖のよさは女を女にし
 アルバムの振袖褪せたままに老い
 希望まだ捨てず妻の里へ来る
 娘の声と間違われたと妻の声
 男の子布団に男の香をしませ
 じいちゃんが軽い布団はいやと言
 未っ子は布団の上で起しに来
 おにぎりの味こま塩が引き立て
 漬物の塩は明治の知恵を借り
 振り袖を着せたい母の手内職
 ミニスカーと振袖着てる松の内
 二口目馬鹿と云われて妻素直
 振り袖へ近所のうわさ乗せて行
 振り袖に娘うれしい夢があり
 振り袖が足のしびれをもてあまし
 振り袖で女らしさの女形
 柳五郎
 肩書を板場の耳へ入れておき
 柳風子
 福寿草ひなたへまわす春日和
 伊久野

川柳ささやま句会

小島無聖報

胡風 正州 与呂志 久米雄 佐加則 芳月 柳子 照路 淨美 春巢 水声 幸仙 博友 万女 孤舟 柳五郎 柳風子 伊久野

全神経耳に付添かしまり
 付添はやつぱり里の母がよし
 大げさにあやまって又叱られる
 出産の娘大げさにお医者呼び
 大げさの傷へお医者は容赦せず
 大げさなゼスチャーであやす孫の守
 大げさに泣いて子供が我を通し
 大げさに甘えた後は何かあり
 夜ふかしもあつさり止んだらばい
 もてぬ奴とうとうかんばんまねばり
 十二時を過ぎて佳境の夜深し
 夜ふかしの背中へそと母はかけ
 徹夜まで欠付合いに借を言
 夜更しへ欠伸片手でもの言
 今年こそ木から落ちない猿で生き
 申元旦天下取りそな子が生れ
 将来を誓える権利できた年令
 成人式乳房が痛い帯の位置
 一票になる成人へかしまり
 大阪形水報

オースケ川柳会

大阪形水報

ひか平 青峯 古仙 村雨 枝葉 茂村 猪村 初音 可住 泰舟 案山子 尺 無聖 実世 美露 神田

年ごとにライバル消えてゆくさみし
 落着かずライバルよ今何してる
 マークした友黙々と道歩む
 商いに先手先手とにくい奴
 明日あると信じて朝のベタル踏む
 明日入試家中早寝をさせられる
 スーパーへ出さぬ権威を持つマーク
 明日嫁ぐ娘が寝酒の酌に来る
 月賦屋でウールマークをたしかめる
 触角を立てライバルの動き知る
 南海電鉄川柳会 (大坂市) 辻圭水報
 特急の旅祖父が賞め祖母が賞め
 特急を駆使して店舗拡張し
 金出さぬ人が乗ってる特急車
 特急が出て見送りがみな帰り
 特急券払戻しの厄に逢い
 特急のほこりをあびて待つ各停
 駅弁におそいが特急停車駅
 特急と各停が出て水をまき
 あすなる川柳会 (大坂市) 川村好郎報

近詠

須坂市 高峰 柳児

長生きの顔がお寺で巾がきき
 ささやかな抵抗買い溜めをして満たし
 風邪ばかり便乗をして社をサボリ
 補聴器がやっと納得した笑顔

今治市 月原宵明

皆様の金庫不渡り容赦せず
 地下足袋の形で崩した霜柱
 上田市 金子 吾風
 ボールペン集金人のいいすべり
 御先祖が見て御座つしやるミニの膝

二級酒と言わねばそれで通る客
 満腹になれば意見も交って来
 慶之助 弓彦

二日酔い意見もせぬが世話もせず
 二つくりとおでこ意見聞いており
 収賄の鍵を握った請求書
 繰越しの額がふえてた請求書
 二級酒とわかりこの頃飲めません
若芽川柳会 (堺市)
 四月十二日(金)
 衣がえ・夜汽車・反応
 堺市九間町山ノ口筋
 八木摩太郎宅

待ったのあなたの心年賀状
 ひやかしに半分嫉妬も混って
 ひやかしも程々にせい夜が更ける
 ひやかして買ったバナナがくさって
 初春の鏡しみじみ年思
 とくとくと狐の死骸首に巻き
 長男に格上げ兄の死重き
 品をほめ安いとほめて買わず去
南海川柳会
 四月十八日一六時
 マイカー・あきらめ・巡視
 ナンパ高架下 親和クラブ

駒つなぎ

岸 南柳報

足早やに男を抜いて行くブーツ
 まん中の席で早退出来なんだ
 まん中の威勢よいのが席をとり
 まん中の辺から無心となる手紙
 割勘で赤い気炎が手をたたき
 勘定は貴方まかせのオドリ食い
 勘定を酔わぬ方が払わされ
 誰が勘定してくれたかぶったり
 新調の帽子脱いだらみんな可愛い娘
 ヘルメット脱いだらみんな可愛い娘
 ヘアデアは帽子にもあり羽田着
 散髪屋出てから帽子さげて行き
 筆で食っていますとはかりベレ帽
堺川柳会
 四月二十三日一六時
 ランドルセル・転ぶ・名刺
 堺市九間町山ノ口筋
 八木摩太郎宅

ハワイ報知柳壇

前山北海報

移民史を繰れば茨のバイオニア
 一粒の麦と讃えんバイオニア
 楽園をきざく血と汗バイオニア
柳山柳葉
 前山北海報

若芽川柳会 (堺市) 四月十二日(金) 衣がえ・夜汽車・反応 堺市九間町山ノ口筋 八木摩太郎宅	南海川柳会 四月十八日一六時 マイカー・あきらめ・巡視 ナンパ高架下 親和クラブ	堺川柳会 四月二十三日一六時 ランドルセル・転ぶ・名刺 堺市九間町山ノ口筋 八木摩太郎宅
--------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------

草分に壁堅すぎ養老院
 バイオニア叙歎の沙汰に目がうるみ
 バイオニア静かに眠る万霊の碑
 バイオニアアドロムを抱いて孫に見せ
 バイオニアアアの肩書に過去が生け
 金字塔の裏に涙の開拓史
 背伸び・ヒマもなかりしバイオニア
 ホレホレ節昔をしのぶバイオニア
 バイオニア変る世相に腹が立ち
 バイオニア歴史を飾る百年祭
 元気者今や名譽のバイオニア
 パイオニア粉骨砕心今日の幸
 パイオニア万節の碑に苔蒼し
 涙の結晶史上に飾るバイオニア

虹 蛙 山 水 月 枝 風 茶 翠 坊 山 紅 潮 南 弦 泉 青 虹
 笑 河 曉 東 紅 山 山 紅 潮 南 弦 泉 青 虹
 有 舟 丹 田 溪 翠 坊 山 紅 潮 南 弦 泉 青 虹

カラーとミラーの
びっくり天国
 3月20日→6月2日
 入園料...130円・小人70円

●虹の広場
 動く彫刻ブレイスカルプチュアやカラーロードなど虹色の美しい会場ノ

●まぼろしの城
 日本初公開のカレイドスコープ、鏡のトンネル...神秘的な世界を表現ノ

●魔法の洞窟
 不気味な妖怪の棲むトンネルですノ

宝塚ファミリランド

▼西尾 葉氏 三月十三日から十七日まで常夏の奄美大島へ四泊五日の旅をされ、一月には台湾、沖縄とこのところ南方についておられる。一冗談を云ううち空港もう真下一葉。

バイオニアの苦難の汗と血今日築き
 学士から博士も育ててバイオニア
 財産と名誉叙歎でまた光り
 無から有これも涙のバイオニア
 バイオニア孫に囲まれ八十路越え
 バイオニア次代の原動力となり
 バイオニアこつこつためていま地主
 バイオニアの文字もうすれし墓参り
 バイオニア苦闘賛える碑が高し
 表彰に笑顔の映えるバイオニア

北銀三滝喜紫素幽当
 海水田田兵兵雲雲柳榮
 村本本衛火華華柳榮

若本多久志川柳句集

「老いの坂」

五二〇円
 送料 共

ふじかけ短詩陸会 (鳥取市)

礎山報

校長に賞められても鼻交わらない
 鼻のホクロ田舎の祖母を思い出し
 姉の鼻顔全体をひきたたせ
 ひくい鼻結構可愛い女の子
 鼻低いけれど生きてる感謝する
 母の留守さびしう猫の鼻つつく
 人が皆何と言おうがうち(私)の鼻
 これまで小学生
 御面接へ鼻白んでる 深呼吸吸
 面円満ですネ少々鼻調し
 だんご鼻人が丸いと強調し
 人の好い証処のようにだんご鼻
 あまり鼻高過ぎ良縁とり逃がし
 御苦勞さん鼻の汗なと拭きささい
 にくめない鼻が居眠る女店員
 どこでも鼻たたいてるコンパクト
 鼻高くなったようなり免許証
 同情が過ぎ妻の鼻かきまわし
 どこからか鼻にとどいた金木せい
 美しくしい鼻まで母はあんじだし
 良縁と鼻の高さまでほめる
 泣が出来大だんご鼻苦にならず
 泣いたとは見せまい鼻へパフたく
 鼻が気になる娘の恋を母が知り
 良縁へ鼻の高さは無関係
 流行が親にもらった鼻を変え
 今日からは花嫁と言う鼻の色
 甘えたい女の心鼻へ出る
 鼻たれて居た子が社長の椅子をしめ
 悲しみへ鼻が最初に乗をさき
 女子大でも鼻まで交らな
 鼻までも母によく似て利発な児
 鼻声で甘えた昔棚に上げ
 学歴が鼻にかかって縁逃がし

梅野 礎山報
 カッチ 礎山報
 きち 礎山報
 朱宏 礎山報
 惠実 礎山報
 富子 礎山報
 政明 礎山報
 逸秋 礎山報
 秀長 礎山報
 千鶴 礎山報
 多鶴 礎山報
 英子 礎山報
 一加 礎山報
 一司 礎山報
 晏也 礎山報
 章代 礎山報
 久人 礎山報
 和久 礎山報
 長平 礎山報
 忠志 礎山報
 キク 礎山報
 鎮也 礎山報
 征也 礎山報
 虚也 礎山報
 佳風 礎山報
 女風 礎山報

低気圧らしいと見たり妻の鼻

礎山報

着飾ったわが娘を前から横から見
 借金をしてまで飾る七五三
 娘を飾る心に負けた出来心
 不動尊柚は飾れど無信心
 枯木まで雪をかむって山飾り
 日本髪ドライと見えて飾りよう
 元旦へ御幣も切って飾り
 灯がつけば生きねばならぬ顔飾り
 交際した飾り着互に振り返り
 着飾った時れ着互に振り返り
 娘の部屋とひと目でわかる飾りよう
 飾り気のない素直さが親しまれ
 美しくしく尼僧を飾る白頭布
 日本髪今年ゴールの飾り
 着飾って居てもお里はあらそえず
 娘を飾りたてて別れの涙拭く

利子
 明子
 貴子
 晏子
 一章
 長平
 長夫
 富子
 和久
 志也
 佳山
 礎山

ふじかけ短詩陸会

藤本礎山報

飾る気は無いけどリボン好きだから
 娘を飾り過ぎた噂が苦を招き
 力では勝てずことばで身を飾り
 もったいない餅花はただ飾るだけ
 どうせ捨てる餅花飾り惜しくなり
 鏡餅も飾りデパートの師走
 鏡餅ねずみの分も飾るらし
 南方の蝶で飾った応接間
 着飾ってはいない熱帯魚がきれい
 熱帯魚ブームに無理をして飾る
 部屋飾る一つにされた熱帯魚
 餅花を飾り正月ももうわすか
 会場の当番バラで胸飾る
 見るよりも奇麗に絵はがき飾りたて
 鏡餅飾って正月あと二日
 自動車がうちより奇麗にしめ飾る
 華瓶を飾り来賓の指定席
 成人の日の姉ちゃんの飾りよう
 飾る気の言葉母さんすぐ見抜き
 無縁墓飾り寒菊群れて咲き
 ほほえみを飾る金歯を前に入れ

これまで小中学生

新春飾りして応接間暖たかし
 適令期そそる飾る金が要り
 飾りたてて男手玉にとる女
 売物で飾って雲竜型のシコ
 横綱で飾って雲竜型のシコ
 小説になれば意外に飾られる
 熱帯魚のように飾って夜の蝶
 満足な顔して着飾る娘に見惚れ
 娘の見合に着飾る母に念が入り
 しめ飾りなくとも屠蘇は酌むとする

これまで小中学生

多鶴子
 武志
 秀男
 泰嗣
 久嗣
 昂人
 ナミ子
 千重
 喜美

季代
 佐知子
 恵子
 和宏

★清水白柳氏は宮川公平製作所二階の寿多皆
 (スタミナ) 川柳会へ作句指導に出席。

黄銅六角ポールトナット
 及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
 TEL 06) 三四五一—四
 夜間 06) 四四〇八

★陽春四月ノ一枚一枚脱い 云われるような本をこしら
ていく身に心まで軽い。 えた。

★自選百句は好評である。 ★「きやり」は送本するた
★百人集は川柳塔賞の九位 びに礼状がくる。頭がさが
と十位の方々を出せなかつた。おわび申します。

☆徹夜マンはこれから楽に
★ついに本誌も値上げする なる。ストープ代だけでも
ことになった。高くないと 助かる。(不二田一三夫)

・誌代改正・

昨今の物価高騰にやむをえず五月号から誌代を百四十
にいたしました。よろしくご諒承のほどをお願い申しあげ
ます。内容の充実をはかり、これにおこたえたいしたいと
存じます。なお、すでにお払いこみの方は誌代切れからで
結構でございます。こんなこともよろしくご支援のほどを重
ねてお願い申し上げます。
川柳塔社

六月号発表(4月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵選
近作柳樽(10句) 若本 多久志選

課題吟(各題5句以内)

- 「愛 称」 野村 岬 月選
- 「コーヒー」 林 葵 丘選
- 「伝 説」 越 智 一 水選

・募

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字
は楷書で新かなづかいにしてください。

川柳塔社四月句会

日時 四月八日(月) 午後六時
会場 自安寺(妙見さん)
市電千日前下車スグ北側
(電話211・1478番)

兼題 柳 話
「ベテラン」
「新 築」
「百 年」
「流れる」
西尾 栞 選

兼題 傍島 静馬 選
八木 摩太郎 選
戸田 古方 選
西尾 栞 選

席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 百五十円
★ 投句だけの方は切手五十円封入

七月号発表(5月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵選
近作柳樽(10句) 若本 多久志選

課題吟(各題5句以内)

- 「七 夕」 安平次 弘道選
- 「別 居」 小谷 仙 山選
- 「ライター」 吉原 紅 月選

★川柳塔の投句は本社同人に限りません。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷仲之町20

川 柳 塔 社
電話 大阪 073985番

5月の兼題 「ハイミス」 「山」
「素」 「実印」

定価 百二十円(送料六円)

半年分 七百五十円(送料共)
一年分 千四百四十円(送料負担)
昭和四十三年三月二十五日印刷
昭和四十三年四月一日発行
大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

編集兼 中島 蓬太 郎
発行人 大陽印刷株式会社
印刷所 大陽印刷株式会社
郵便番号 五四二
大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

発行所 川 柳 塔 社
電話 大阪・二七一―三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

明日のために
今日ものむ
ポポンス

シオノギ製薬

仲代達矢

551

料理も電話も

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬策 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天卓頭支店／中之島サン・ストアー



開催中→6月2日まで
主催・朝日新聞社

あやめ池

グランドフェア

サザエさん

お茶の間の人気者サザエさんをはじめ
カツオ君・ワカメちゃんら おなじみの
一家がユーモアと笑いをふりまきます
新装の円型大劇場も日本歌劇団出演の
豪華ショー「サザエさん」15場毎日上演
あやめ池自慢の遊戯施設もお楽しみ…

▶あやめ池駅前が遊園地
大阪上本町から急行28分
京都から 西大寺のりかえすぐ
近鉄各駅からおとくな割引
引入場券つき乗車券発売

入場料…200円 こども100円 団体は割引
(円型大劇場 ご観覧はほかに整理券50円 特別席100円)

近鉄 あやめ池遊園地



一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影